

平木1号墳試掘調査報告書

－高松市鬼無町山口所在の横穴式石室の調査－

1990.3

高松市歴史民俗協会

平木1号墳試掘調査報告書正誤表

3頁7行目 古宮權現社古墳→古宮古墳

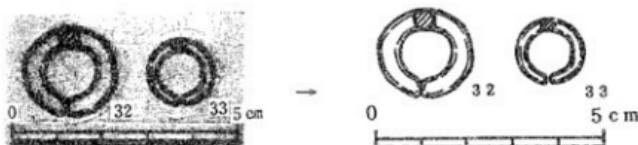
3頁8行目 古宮權現社古墳→古宮古墳

3頁23行目 必死 →必至

7頁17行目 立ち割り →裁ち割り

7頁24行目 立ち割り →裁ち割り

21頁図10下段



23頁12行目 見部 →耳部

23頁18行目 須恵室陶棺 →須恵質陶棺

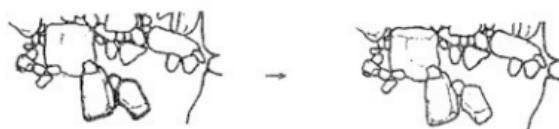
23頁19行目 須恵室陶棺 →須恵質陶棺

25頁図11スケール



29頁番号27 胸部 →脚部

図14 羨道部分



序

文化財は、それぞれ固有の価値を保有し、個性豊かな地域の歴史的な環境づくりに貢献しています。

それだけに、わたしたちは、地域の文化財に学び豊かなふるさとの創造に努めなければならないと思います。

このたび、勝賀山の東南に位置します神高古墳群の内のひとつ、平木1号墳が所在する土地で、宅地を造成しようとする計画が持ち上がりました。

しかし、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地でありますので、土地所有者と協議を行い、とりあえず古墳の正確な範囲と性格を調べることになりました。

調査は、国庫補助事業として平成元年7月から実施し、調査結果を本報告書にまとめました。

調査にあたっては、香川県教育委員会・香川大学ならびに土地所有者、多数の関係者のご指導ご協力をいただきましたことに対し、厚くお礼を申し上げます。

平成2年3月

高松市教育委員会

教育長 三木 義夫

例　　言

1. 本書は、高松市教育委員会が国庫補助及び県費補助を得て、平成元年度に実施した試掘調査報告書である。
2. 調査対象の平木1号墳は、高松市鬼無町山口 927番地に所在する。
3. 調査にあたっては、土地所有者、神高铁雄・平木弘氏の、御理解と御協力を得た。
4. 調査期間中、高松西高等学校（校長山口寮式氏）の御協力をいただいた。
5. 地元自治会および住民諸氏の御尽力と御助力をいただいた。
6. 香川大学助教授・丹羽佑一氏、香川県文化行政課の調査指導をいただいた。また香川大学には資料の提供に快諾をいただいた。
7. 調査関係者は、下記のとおりである。

教　育　長	三木義夫	文　化　振　興　課　長	三木　丸夫
教育部　長	多田　孜	文　化　振　興　課　長　補　佐	亀井　俊
教育部次長	増田昌三	文　化　振　興　課　文　化　財　係　長	藤井　雄三
		文　化　振　興　課　事　務　吏　員	山本　英之
		文　化　振　興　課　事　務　員	川畑　聰
		文　化　振　興　課　非　常　勤　嘱　託	中西　克也

8. 調査全期間において、市内在住の末光甲正氏の参加を得た。
9. 現地調査は、藤井総括のもと、川畑、末光、中西があたった。
10. 整理作業は、藤井総括のもと、川畑、末光、中西があたった。
11. 本報告書の執筆分担は、第1章第1節及び第2章の一部を藤井が、それ以外を川畑が担当し、編集も行った。
12. 写真は川畑に、実測・トレースは川畑、中西による。
13. 挿図の一部に、建設省国土地理院発行の25,000分の1の地形図を使用した。
14. 以下の方々の御教示を得た。

岩橋孝、大山真充、大久保徹也、杉山直人、溝瀬修三、山中一郎、山元敏裕
(敬称略、五十音順)

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の経緯 1

第2節 調査の経過 1

第2章 立地と環境 3

第3章 調査の概要

第1節 調査の概要 7

第2節 墳丘 9

第3節 石室 14

第4節 墓道 17

第5節 遺物 17

第4章 まとめ 23

観　察　表

須恵器	28
土師器、鉄製品、陶棺、装身具	29

挿　　図

図 1 周辺遺跡分布図	5
図 2 墳丘測量図	8
図 3 第 1 ~ 3 トレンチ土層図	10
図 4 墳丘範囲想定図	13
図 5 墳丘・石室断面図	14
図 6 第 3 トレンチ構造平面図 1	15
図 7 第 3 トレンチ構造平面図 2	16
図 8 遺物出土位置図	18
図 9 古代~中世土器実測図	20
図 10 装身具実測図	21
図 11 大型提瓶実測図	25
図 12 出土遺物実測図	26
図 13 陶棺実測図	27
図 14 石室実測図	別添

図　　版

図版 1 - 1 調査前風景（遠景）	
2 調査前風景（伐採後）	
図版 2 - 1 第 1 トレンチ全景（南西から）	
2 第 1 トレンチ東壁	
図版 3 - 1 第 2 トレンチ全景（西から）	
2 第 2 トレンチ南壁	
図版 4 - 1 第 3 トレンチ全景（北から）	
2 第 3 トレンチ南壁	
図版 5 - 1 第 3 トレンチ中央断面（西向）	
2 墓道全景（西から）	

- 図版 6 - 1 排水溝全景（南から）
2 墓道須恵器出土状況
- 図版 7 - 1 羨道土師器出土状況
2 墓道鉄斧出土状況
- 図版 8 - 1 羨道陶棺破片出土状況
2 羨道須恵器、陶棺破片出土状況
- 図版 9 - 1 玄室鉄刀出土状況
2 玄室須恵器出土状況
- 図版 10 - 1 玄室陶棺破片出土状況
2 石室前面
- 図版 11 - 1 玄門（羨道から）
2 奥壁
- 図版 12 - 1 玄室右側壁（奥から）
2 玄室右側壁（羨道から）
- 図版 13 - 1 玄室左側壁（奥から）
2 玄室左側壁（羨道から）
- 図版 14 - 1 羨道右側壁
2 羨道左側壁
- 図版 15 - 1 玄門（奥から）
2 床面（奥から）
- 図版 16 - 1 仕切り石（羨道から）
2 目貼り（玄室左側壁）
- 図版 17 - 1 側壁裏側（玄室左側壁）
2 側壁裏側（羨道左側壁）
- 図版 18 - 1 墓道より墳丘を見上げる
2 発掘作業風景及び見学風景
- 図版 19 出土遺物
- 図版 20 出土遺物
- 図版 21 出土遺物
- 図版 22 出土遺物
- 図版 23 出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の経緯

平木1号墳は、早くから一般に周知されていた。戦前に編集された香川郡誌、上笠居村誌には既に横穴式石室の略図とともに簡潔な記述がみられる。

本古墳に学術調査のメスが入ったのは、昭和58年の事で、香川大学教育学部、丹羽佑一助教授の手によって実施された。その後、土地所有者から宅地造成の申し出があり、その保存・調査の是非等について協議を続けた。

しかし、香川大学の調査が横穴式石室内の調査にとどまっていた事、墳丘は調査の対象からはずされていた事等、協議資料としては不足の感が否めなかった。そこで平成元年度、国庫補助事業として試掘調査を実施することになった。

現地調査は、高松市教育委員会の職員があたり、平成元年7月5日に開始された。猛暑の中調査は難航したが、8月1日に一応の成果をあげ、器材等の撤収を行った。

その後は室内作業に移行したが、他の発掘調査の関連もあって、決して速やかなる進捗とはいえない。遅々とは進まない作業が形となったのは、平成元年も暮れようとする12月末の事である。直ちに資料を申請者に送付するとともに、香川県教育委員会にも送付した。

現在、当該古墳の取り扱いについては、観意協議中である。

調査にあたってご協力いただいた土地の所有者またはその関係者の方々に、猛暑の中の作業をお願いした作業員各位に紙上をかりて、お礼を申し上げたい。

第2節 調査の経過

現地調査は平成元年7月5日から8月1日にかけて行った。調査は墳丘の範囲確認および古墳の性格を知るためのものであり、そのため墳丘に2本のトレンチを設定するとともに、石室前面にもトレンチを設定した。また主体部である横穴式石室の実測も行った。

7月5日 器材搬入、伐採作業

6日 トレンチ設定後掘り下げ、墳丘測量開始（～7月10日）

10日 石室実測開始（～8月1日）

11日 石室前面のトレンチにおいて渋道側壁の基底石を確認

- 17日 石室前面のトレンチにおいて墓道を検出、墓道上面より須恵器破片多数出土
- 19日 墓道上面において鉄斧出土、高松西高校の生徒約 150名見学
- 20日 淀道より陶棺破片出土
- 26日 墳丘北側および西側に設けたトレンチの調査が終了し、埋め戻す
- 27日 排水溝を検出
- 28日 石室清掃中、奥壁寄りに鉄刀および土師器椀が出土
- 8月1日 石室写真撮影、石室崩落防止作業後、現場作業終了
- 8月2日～2月28日 整理作業

瀬戸内海に面する高松平野は、香東川、本津川、春日川などの河川によって形成された沖積平野であり、古代においては数kmに及ぶ溝入が考えられている。この高松平野の北西にある山、勝賀山の東南麓に平木1号墳を含む神高古墳群が存在する。

古墳はどれも浅い谷の斜面につくられており、東側に平地が開ける。神高古墳群は地形により大きく2つのグループに分かれる。平木1～3号墳、大塚古墳のグループと、古宮権現社古墳、山野塚古墳、神高池周辺の古墳群のグループとである。その中でも古宮権現社古墳が卓越しており、神高古墳群の盟主的存在である。

平木1～3号墳は群中でも割と高所の尾根の南斜面に立地する。その東の眺望は、前面に石清尾山塊が高松平野の真っ只中に横たわり、その西裾を洗うように北流するのが、高松平野最大の河川香東川である。さらに勝賀山と石清尾山塊の中程を香東川と並流するのが、本津川である。

次に、この地域の歴史的変遷に目を移してみる。旧石器・縄文時代の遺跡分布は希薄である。ただし五色台の一角に所在する国分台遺跡は、原石の散乱と、多量の石器の出土で注目される。

弥生時代前期及び中期中葉ごろまでの遺跡は未発見である。最も早い事例は、中期末に比定される摺鉢谷遺跡があげられよう。石清尾山塊山頂部に所在する高地性集落である。

神高古墳群北東にひろがる集落・佐料一帯には、遺物の散布が確認されている。佐料遺跡と呼ばれ、弥生時代後期・古墳時代初頭・奈良時代そして中世の各時期に属する土器片が採取される。また是竹薬師遺跡でも、後期後半の土器が一括出土した。勝賀山東麓から西麓の香西・下笠居や、本津川・香東川流域にも、弥生土器出土の記録や間接的な証拠が知られており、弥生遺跡の増加は必死である。

その他、石清尾山北端下ノ山遺跡で銅鋅二口の出土が知られているが、位置も含めて詳細は不明である。

古墳の数は比較的多い。近辺では、まず石清尾山古墳群があげられる。双方中円墳や前方後円墳等の積石塚古墳が集中することで著名である。群中最大規模を有する双方中円墳・猫塚古墳、庄内期に比定される土器を出土した前方後円墳・鶴尾神社4号墳、刳抜式石棺を主体部にもつ前方後円墳・石船塚古墳等が、山頂や尾根上に連なつ

ている。

石清尾山塊南端には石清尾山古墳群中、唯一の盛土前方後円墳であるガメ塚古墳が存在したが、現在は消失している。

勝賀山から東に最も突出する尾根先端に所在する前方後円墳が今岡古墳で、高松平野の代表的中期古墳である。昭和39年に埴輪質の組合式陶棺が出土している。今岡古墳の北西方面にはかしが谷古墳群がある。昭和59年の調査で竪穴式石室と箱式石棺が見つかっている。

本津川中流を臨んで、前方後円墳・御厩天神社古墳が立地する。その他、袋山周辺に所在する袋山・衣掛・相越の三古墳は、いずれも前方後円墳と考えられているが、実態は不明である。

中期後半から後期前半に属する古墳には、香東川と本津川にはさまれた微高地に位置した相作牛塚古墳があげられる。この周辺には塚状の高まりが多く見られる。確認されていないが、相作牛塚古墳のほかにも古墳が存在すると思われる。

後期後半から終末にかけては、この地域にも横穴式石室を主体部に採用した小規模な古墳が多く構築される。特に石清尾山塊の南のピーク淨願寺山頂には、50余基の横穴式石室墳が集中する。その他、石清尾山塊には横穴式石室墳が数基でまとまる傾向がある。

本津川が分流する付近に単独で所在するのが御厩大塚古墳で、平地に半壊した巨大な横穴式石室をさらしている。また現在は失われているが、勝賀山東麓の南斜面には、善師垣古墳群、かしが谷4号墳、沢池古墳が存在した。

古墳時代以降の遺跡には、師楽式土器を出土した小原遺跡や、先述の佐料遺跡、さらには勝賀山北麓の古墳の空白地帯に出現する勝賀廃寺が注目される。また鬼無からは、国分寺、国分尼寺のうち、特に後者とは至近距離にある。

中世になると、勝賀城、佐料城、藤尾城、黄峰城等、いずれも香西氏関係の城郭があり、戦国時代の繩張りを良く残す。



図1 周辺遺跡分布図 (縮尺1/25,000)

遺跡分布図地名表

- | | |
|-------------|---------------|
| 1. 勝賀城跡 | 19. 山野塚古墳 |
| 2. 勝賀廃寺 | 20. 空家古墳 |
| 3. 藤尾城跡 | 21. 古宮古墳 |
| 4. 是竹薬師遺跡 | 22. こめ塚古墳 |
| 5. 沢池古墳 | 23. 神高池西古墳 |
| 6. かしが谷 1号墳 | 24. 神高池北西古墳 |
| 7. かしが谷 2号墳 | 25. 山口神高氏宅前塚跡 |
| 8. かしが谷 3号墳 | 26. 相越古墳 |
| 9. かしが谷 4号墳 | 27. 衣掛古墳 |
| 10. 佐料遺跡 | 28. 袋山古墳 |
| 11. 佐料城跡 | 29. 御厩大塚古墳 |
| 12. 善師垣古墳群 | 30. 王墓 |
| 13. 貴船池下塚跡 | 31. 相作牛塚古墳跡 |
| 14. 今岡古墳 | 32. カメ塚古墳跡 |
| 15. 平木 1号墳 | 33. 半田・小坂塚群 |
| 16. 平木 2号墳 | 34. 青木塚群 |
| 17. 平木 3号墳 | 35. 紙漉塚群 |
| 18. 大塚古墳 | |

第3章 調査の概要

第1節 調査の概要

平木1号墳の墳丘は後世の削平により、ほとんどその旧形をとどめていない。墳丘東側は民家が建ち、大きくえぐられ、石室側壁の裏側が露呈している。南側は石室の開口方向だが、かつて納屋が建っていたため、羨道の大半は壊されている。また西側もかつて畠地だったため、墳丘を大きく削られている。墳丘北側においてかろうじてU字状のくぼみが認められる。

今回の調査は古墳の墳丘の範囲を確認するためである。そこで墳丘2カ所にトレントレンチを設定するとともに、羨道の残存状況を確認するために石室前面にトレントレンチを設定した(第3図)。墳丘北側のトレントレンチを第1トレントレンチ、西側を第2トレントレンチ、そして石室前面を第3トレントレンチとする。

第1トレントレンチは墳丘と後背の斜面との間をまたぐように設定した。長さ7m、幅1mである。石室の主軸上に設定したかったが木の切り株があり、主軸より東にずらした。第1トレントレンチでは後背の斜面から流れ落ちた大量の土砂及び礫が堆積しており、それを除去したところ、古墳の墳裾を確認できた。ただし、周濠等の遺構については、トレントレンチをそれ以上北へのばすことができず、確認することはできなかった。

同時に、墳丘に一部立ち割りを入れた。墳丘は盛土で細かく分層できるものの、土のしまりも弱く、版築は認められなかった。ただしこれは墳端のことであり、墳丘全体については不明である。また上の2層(17、18)からは近代の陶磁器が出土しており、墳丘上から流出した土の堆積層であろう。

このことより、墳丘北側に厚く堆積している土砂は近代以降であり、墳丘北側も改変を受けている可能性が考えられるものの、残存状況は比較的良好であると考えられる。

第2トレントレンチは墳丘中央から西に向けて、長さ13.5m、幅1mで設定した。しかしながら墳丘部分においては、当初立ち割りを入れる予定であったが、石室崩壊の危険があったため断念した。

墳丘西側の平坦部では1mほど掘削したところで、岩盤にあたった。その間、4層ほどの堆積が見られるが、周溝等の遺構は検出できなかった。ただし、径50cm前後の礫群をトレントレンチ西端において検出した。これが古墳に伴うものかどうかについては、調査範囲が限られており、明確にすることはできなかった。現在の墳端近くより須恵器壺破片が出土している。

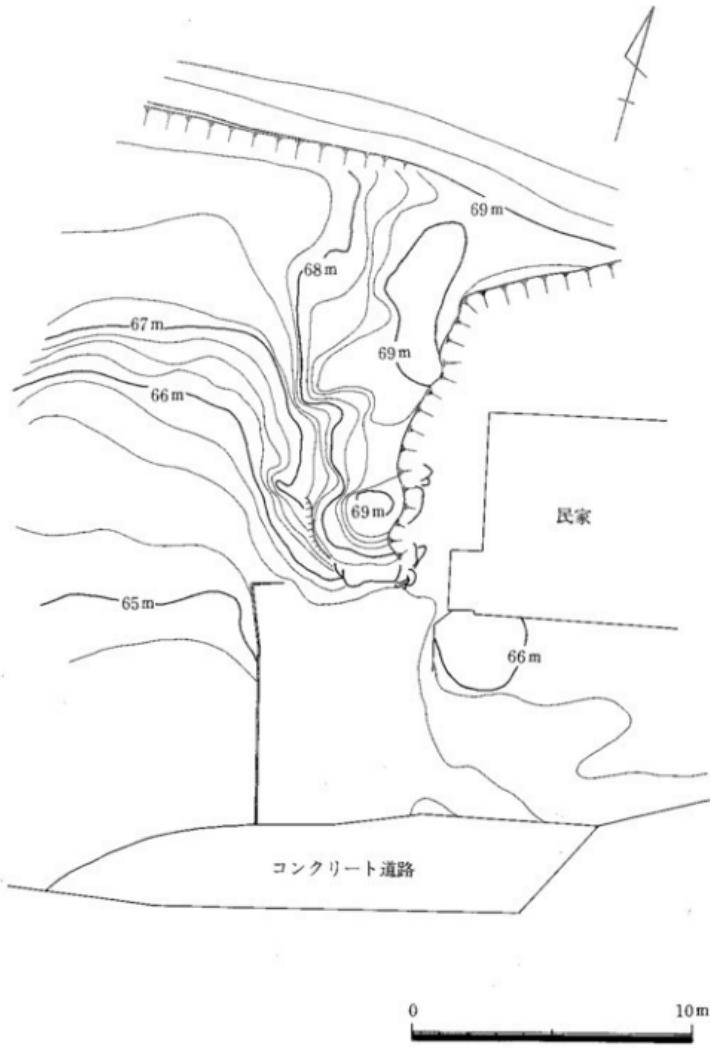


図2 墓丘測量図

第3トレントは石室前面に、長さ13.5m、幅8mで設定した。遺構の残存状況はあまり良くないと最初思われたが、調査を進めていくうちに、比較的良好に残っていることがわかった。トレントでは花崗土の層が南側にいくほど厚く堆積しており、民家を建築した際の盛土であろう。その下をさらに掘り進めていったところ、羨道の床面と墓道を検出した。羨道及び墓道を検出するまでに4層ほどの堆積が認められるが、羨道破壊後に堆積したものである。

羨道部分では黒色土の埋土を除去したところ、新たに5個の基底石と2カ所の抜き取り穴を検出した。また床石及び排水溝をも確認した。床石はあまり残存状況は良くないものの、排水溝とその蓋石は比較的良好に残っていた。ただし、閉塞石等については確認できなかった。

墓道は石室の主軸より西に振っており、そのまま調査範囲外に逃げる。上面において多数の須恵器破片、鉄斧1つを検出した。

羨道及び墓道については、後で詳しく述べる。石室構築時の掘り方については、調査範囲が限られており、検出することはできなかった。

調査終了後は、第1・2トレントは完全に埋め戻し、第3トレントは南半分のみ埋め戻し羨道部分はグランドシートで覆った。また玄室の天井石の一つにひびが入っていて非常に危険であるため、玄室内に支柱を立てるとともに石室を封鎖した。

第2節 墳丘

平木1号墳は大きく見れば東南東にのびる尾根の南斜面に立地するが、その斜面でも南にのびる尾根状の高まりを利用して構築されている。現在の墳丘は先にも述べたとおり北側を残して大きく削られているため、現状からはその規模及び形を類推することは困難である。

しかしながら、第1トレントで確認した墳裾と、第3トレントでの羨道の位置より復元した場合、直径約19mの円墳となる。円墳と復元した理由は、墳丘北側において斜面からの土砂の堆積が激しいものの、くぼみが円を描いて墳丘をまわっているからである。さらに墳丘が南北方向の尾根状の高まりを利用して構築されていることを考えると、実際は南北方向の楕円形であった可能性が指摘できる。墳丘の円の中心は、玄室の中央近くに位置する。

墳丘の高さは、北側の墳裾と羨道の端では同じ墳裾ながら約2mの落差があるため一概に求めることはできない。しかしながら玄室床面より現在の最頂部まで4m近くあり、実際は5~6mあったと想定できる。

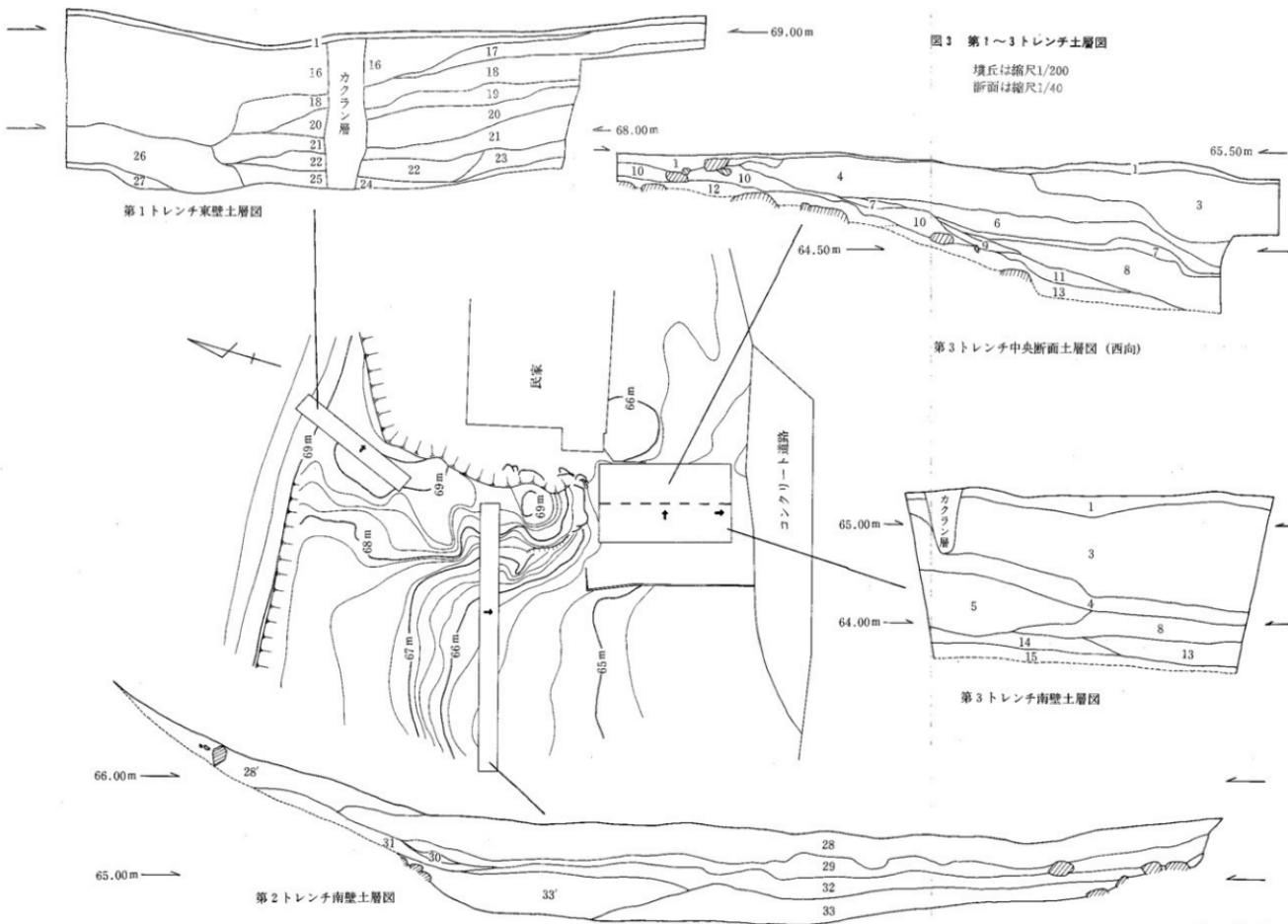


図3 第1~3トレンチ土層図

填丘は縮尺1/200
断面は縮尺1/40

第1～3 トレンチ層名

1. 淡黒色腐食土層
2. 明黄褐色粘質土層
(10より明るい)
3. 灰茶色粘質土層
4. 花崗土層
5. 暗青灰色粘質土層
(黄斑点含む)
6. 暗黄褐色土層 (黒斑混じり)
7. 暗黄黒色粘質土層
(黒斑混じり)
8. 暗黄褐色粘質土層
9. 淡青灰色粘質土層
(橙色斑点混じり)
10. 明黄褐色粘質土層
11. 暗黄黒色粘質土層
12. 黒色土層
13. 暗灰色粘質土層
14. 暗青灰色粘質土層
(茶斑点 (鉄分) 混じり)
15. 明青黒色粘質土層 (礫含む)
16. 暗茶黒色土層 (礫層)
17. 明黄褐色土層 (小石多く含む)
18. 暗赤褐色バイラン土層
19. 赤黄褐色土層 (細かい)
20. 赤褐色土層 (細かい)
21. 黄褐色土層 (細かい)
22. 黄黒色土層 (細かい)
23. 淡黄黒色土層 (細かい)
24. 灰黄色土層 (細かい)
25. 暗赤茶色バイラン土層
26. 暗赤茶色土層 (礫層)
27. 青灰色粘質土層 (黄斑混じり)
28. 暗茶色土層 (小石多く含む)
- 28'. 暗茶色土層 (しまりがない)
29. 灰色粘質土層
30. 暗灰色粘質土層 (しまりがない)
31. 暗灰色粘質土層
(30と同じだが暗黄褐色土層を含む)
32. 明黄色褐色粘質土層 (褐色土層、赤色のブロック含む)
33. 暗黄褐色粘質土層
(灰色粘質土層を含む)
- 33'. 暗黄褐色粘質土層
(33よりやや黄色が強い)

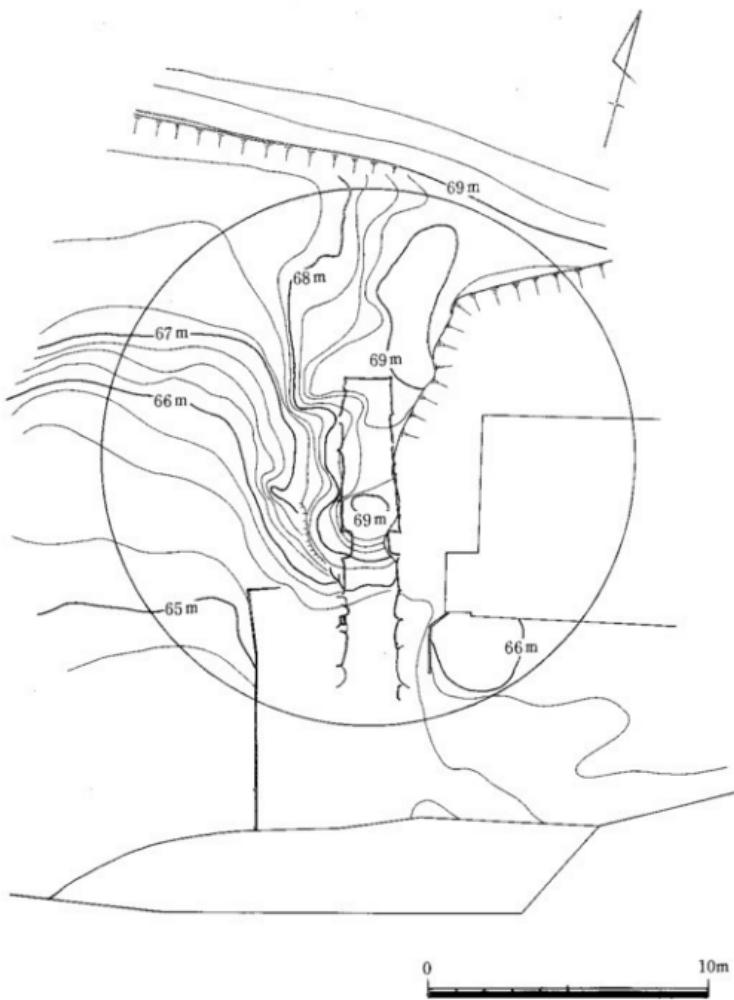


図4 墓丘範囲想定図

版築については、先のとおり不明である。

第3節 石室

南々東に開口する横穴式石室は、玄門が突出するタイプである。石室の残りは比較的良いとはいいうものの、羨道が奥より1石目のみを残して消失している。石室内からは黒色土器A類、瓦器の破片が出土しており、少なくとも平安時代には開口していたようである。昭和58年の香川大学の調査では30~50cmの堆積土が石室内に見られたという^(註1)。今回の調査によって消失していた羨道の部分もある程度の復元が可能になった。

石室全長は11.1mを測り、主軸はN-15°-Wである。玄室は長さ5.4m、幅は奥で1.6m、手前で2m、高さは2.1~2.4m。奥にいくほどすぼまる形態を呈している。一方、羨道は長さ5.1m、幅1.8m、高さ1.8~1.9m(残存部分)。玄門は長さ0.6m、幅1.2m、高さ1.55mを測る。

さらに石室の縦断面を見た場合、2つの傾斜変換点が見られる。一つは玄門で、もう一つは羨道中程においてである。そのため石室奥と羨道先端とのレベル差は約1mにもなる。これは排水しやすいためでもあろうが、同時に地形に左右されたものであろう。墳丘前面は旧地形においては、やや急な斜面である。

構築は、奥壁に石材の中では最も大きな石を鏡石として据え、その上にもう一段のせている。玄室の側壁は比較的大きな石を最下段に据えているが、上段では特に規則性は認められない。4段ないし5段積みだが、右側壁奥のように2段の箇所もある。ゆるい持ち送りが見られる。石と石の間には粘土による目貼りがなされていて(図版16-2)、その粘土中には藁状の植物纖維が見られる。玄室天井石は4枚である。石材は花崗岩である。

羨道は大部分が破壊されて詳細は不明であるが、左右側壁とも奥より1石目は大きな石材を使っている。天井石は1枚しか残っていない。

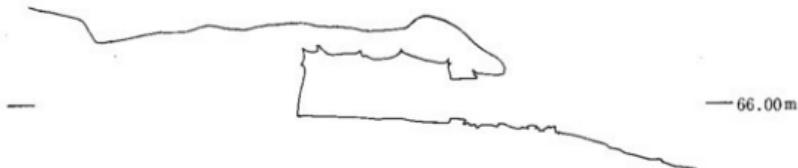
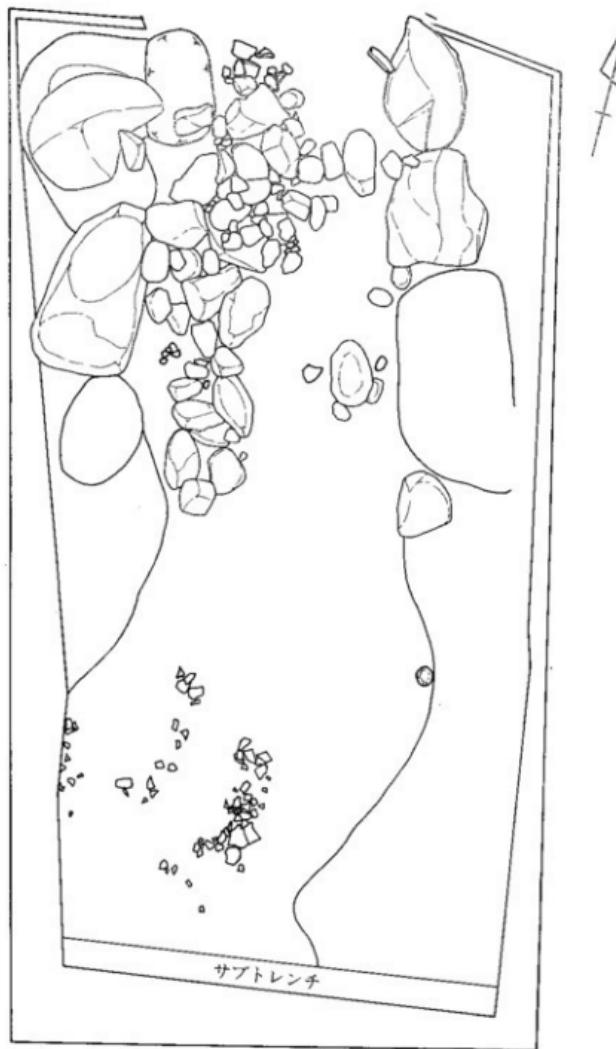


図5 墳丘・石室断面図(縮尺1/200)



0 1 2 m

図 6 第3トレンチ遺構平面図 1

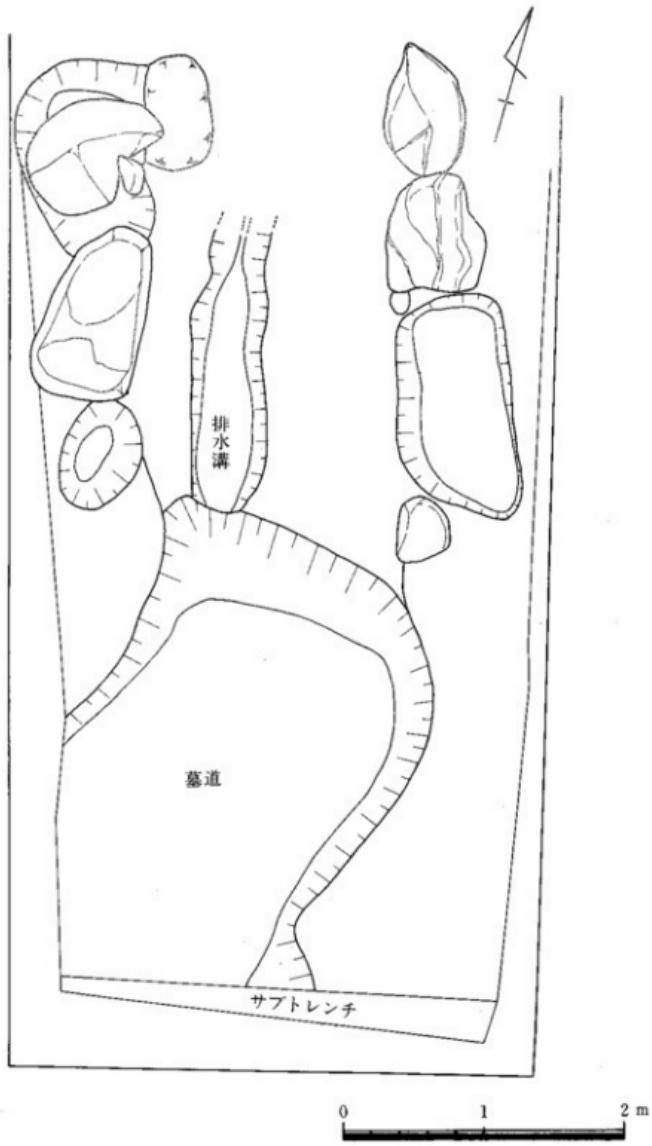


図7 第3トレンチ造構平面図2

床石は玄室前面および羨道北半分（玄門より2.7mまで、先程の傾斜変換点）に敷かれていた。ただし後世の搅乱により、床石の残存状況は玄室北半分をのぞいて良好とは言えない。床石の構造は排水溝を40~50cm大の石で蓋をした後、30cmほどの石で敷きつめている。さらにその上に5~10cmの丸石を敷いている。ただし丸石は玄室北半分しか残っていない。この丸石が1次埋葬からあったのか、それとも追葬時のものなのかは、判断できなかった。

排水溝は玄室では石室の主軸上に設定され、羨道では開口方向に向かうにつれて西にずれる。墳丘の西側に谷があり、地形に左右されたためである。これは墓道とも共通している。今回の調査では羨道南半分のみ蓋石を除去し、溝の埋土を除去した。埋土は暗灰色粘質土であった。排水溝の断面は南側では幅50cm、深さ10cmの浅いU字形を呈し、羨道中央では幅40cm、深さ15cmほどのV字形を呈する。埋土内より土師器破片が出土した。

第4節 墓道

墓道は石室の主軸と方向を異にして南々西にのびている。主軸に対して約45°振る。これは排水溝同様、地形に左右されたものであり、墓道は谷の方に向かっている。谷に当古墳を含む平木古墳群へ通じる道が存在したのであろう。

断面は幅2.2m、深さ20cmの浅いU字形を呈する。暗青灰色粘質土層（茶斑点混じり）の上面から切り込んでおり、埋土は暗灰色の粘質土である。調査範囲外に墓道が続いているため全長は不明であるが、範囲内では3.5mまで確認した。埋土上面より須恵器破片が多数、鉄斧1つが出土した。

さらに墓道が切り込んでいる暗青灰色粘質土層より土師器破片が出土しており、墓道構築前の遺構が想定できるが、調査範囲が狭く明確にできなかった。

第5節 遺物

今回の調査では、須恵器、土師器、陶棺破片、鉄器が出土した。さらに香川大学の調査時に出土した遺物も含めて報告する。

(1) 遺物出土状況

玄室からは須恵器、土師器、陶棺破片、鉄器、金環が出土した。ただし今回は石室実測に伴う床面清掃中に出土したものであり、今後綿密な調査を行えば、さらに遺物は増加するであろう。

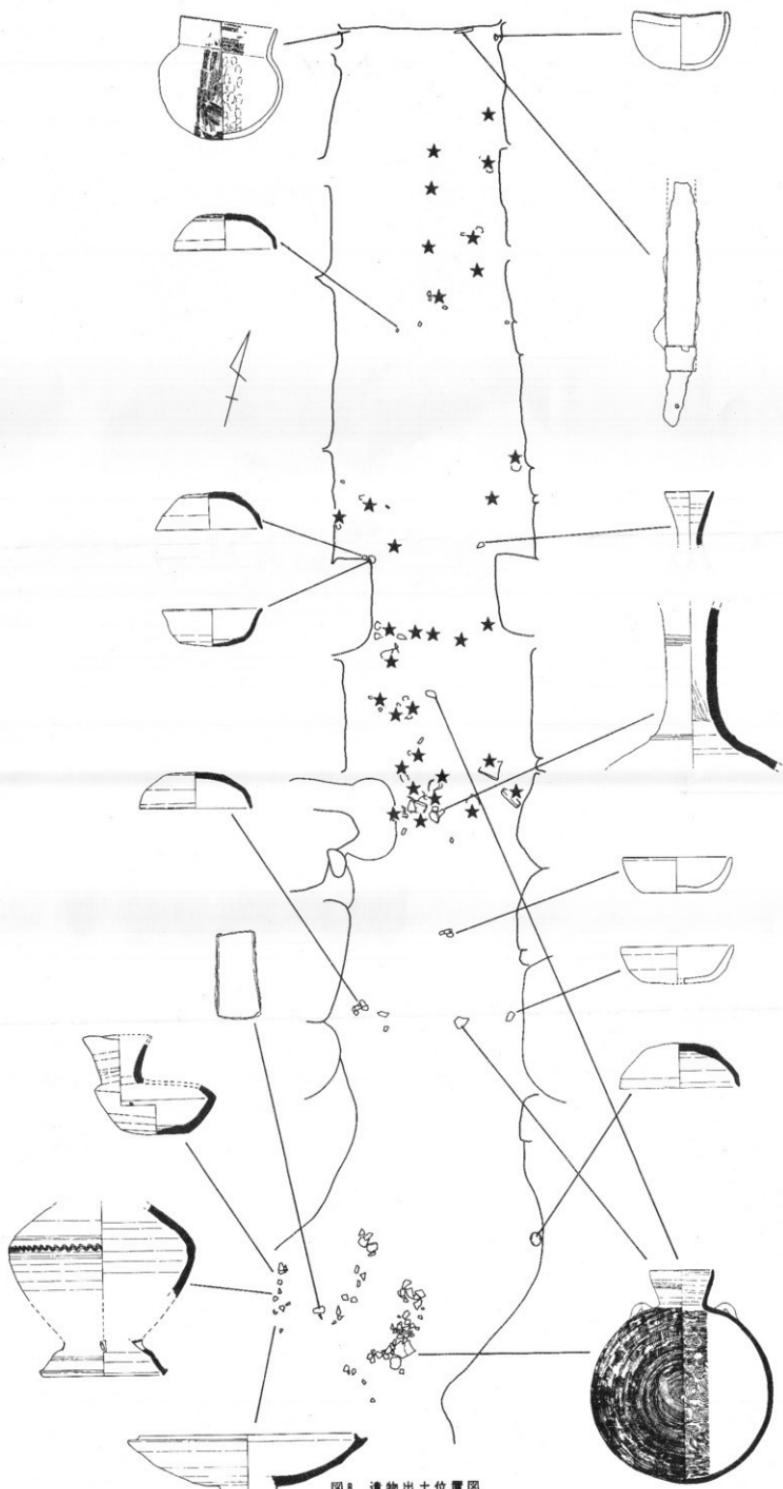


図8 遺物出土位置図

石室・墓道は縮尺1/40

壇瓶は縮尺1/8、それ以外の遺物は縮尺1/4

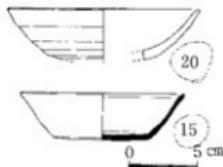
★印は陶棺出土位置

玄室奥からは原位置を保っていると思われる状態で土師器 2 点、鉄刀が出土した。土師器壺 (19) が玄室奥の北西隅に口縁を上にして、土師器碗 (18) も玄室奥の北東隅に置かれていた。また鉄刀 (22) は玄室奥壁に沿って置かれていた。おそらく棺を玄室奥に安置した際に、これら 3 つも同時に添えられたものであろう。

羨道からは須恵器、土師器、陶棺破片、鉄器が出土しているが、原位置を保っているものはない。

墓道からは須恵器、鉄器が出土しているが、埋土上面に散乱している状態であり、墓道が完全に埋まりかける頃に石室内の遺物を外に放り出したものであろう。このことは羨道から出土している破片と墓道からの破片が接合可能であることからも推察できる。

陶棺破片は玄室と羨道において散乱した状態で検出した。しかしながら羨道において集中している傾向が読み取れる(図 8)。また大きな破片も羨道のみで出土した。玄室北半分においても若干の集中が認められるが、これは床面の残存状況が北側において良好だからである。これらのことより陶棺が羨道に安置された可能性が指摘でき、追葬段階のものであると考えられる。



(2) 出土遺物

須恵器は、大型提瓶 1、壺蓋 4、壺身 1、長頸壺 2、台付壺 1、壺 1、平瓶 1、有蓋高壺 1、甕 2、壺 1 その他破片が出土している。

(1)は大型提瓶で、香川県下ではあまり例がないものであろう。体部に叩きを施す点では特異な製作方法だが、体部を成形する最後に円盤状の粘土で蓋をする点や、体部外面にカキ目を施す等、従来の提瓶の製作方法で作られている。

(2)～(5)は壺蓋である。全体に小さく、つくりも粗雑である。特に(4)は他に比べ凹凸が激しい。また(5)は径が大きく他より丁寧につくられているが、焼成が悪く表面の剥離が著しい。

(6)は壺身で、外反する口縁をもつ。底面は回転ヘラケズリを施さず、ナデで仕上げている。

(7)は壺体部の破片だが、全体がどのような形であるか不明。(8)と(10)は長頸壺の破片と考えられる。ただし時期については古墳時代のものかどうか検討を要する。(11)は壺の体部と台である。接合は不可能だが、同じ箇所から出土しており、色調・胎土・焼成も似ていることから同一個体であろう。

(12)は有蓋高壺、(13)(14)は甕の口縁部破片。(15)は壺だが、平安時代のものである。

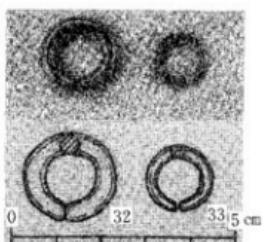


図10 裝身具実測図

土器は他に黒色土器、瓦器が出土しているが細片であり、今回は報告しない。

鉄器には、斧、刀、釘、鎌の種類がある。

(1)は鉄斧で、いわゆる袋状鉄斧である。ほぼ完形。頭部断面は長方形で、頭部に比べ刃部がやや聞く。錆の付着が激しいため、詳しい観察はできない。

(2)は鉄刀で、刀身上部を欠損する。刀身と柄はまっすぐにあるのではなく、柄が上方にやや屈曲する。刀身と柄の境には金属製の板を巻き付けている。柄には4mmほどの穴があり、そこに木製の柄を取り付けるための釘が貫通している。錆の付着が激しい。

(3)(4)は鉄釘で、(3)は完形、(4)もほぼ完形である。他に4本出土しているが、すべて一部分のみである。断面はどれも四角形。

(5)は鉄鎌の柄の可能性がある。他に同様の鉄片が2つ羨道より出土している。断面はどれも四角形。

陶棺破片は、香川大学及び今回の調査とを合わせて約170点出土しており、すべて同一個体のものである。全体を復元するには困難な大きさの破片しか残っておらず速断は避けたいが、各破片より類推した場合、おそらく家型になることにまちがいはないであろう。

陶棺は須恵質で、その製作においても須恵器をつくる技法でなされている。脚部(26)(27)は円筒型で、ロクロ成形によってつくられている。最大径を真ん中よりやや下にもつ。

(28)は底板の破片であるが、脚部接合痕が明瞭に観察できる。脚部の接合方法は、底板にある程度乾いた脚部を上下逆にして押し込み、その後底部を指でなでて接合を強めたと考えられる。当然脚部も単なる円筒型ではなく、底のあるカップ状であったと

思われる。

(29)は側壁の破片、(30)は側壁のコーナーの破片、(31)は側壁の上部の破片である。側壁の製作は、格子の叩きと同心円文の当て具で叩き占めた後、それを丁寧になで消している。

(33)(34)は金環である。それぞれ玄室北と南より出土している。

(註1) 香川大学教育学部歴史研究室「鬼無町平木古墳群」『文化高松』第6号 高松市文化協会 1984年

第4章 まとめ

平木1号墳はこれまで述べたとおり横穴式石室を主体部とする古墳である。ここでは出土した遺物から古墳の年代観を示したい。

出土した須恵器の内、年代を探るのに適当な資料は壺、有蓋高壺、提瓶、平瓶である。やや数が少なく、今後の資料の増加を期待したい。土師器についてはまだ明確な編年観は示されておらず、今回は割愛させていただく。

壺蓋(2)～(4)は小型で、口縁端部が丸く、外面の稜は消失しかけている。回転ヘラケズリ調整を施す範囲も限られており、かえりが逆転する直前のもので田辺編年(註1)のTK209に相当する。また壺蓋(5)は(2)～(4)より形骸化しておらず、TK43相当であろう。壺身(6)はかえりが逆転した後のもので、TK217～TK46相当であろう。

有蓋高壺(7)は径が大きいが、かえりの立ち上がりが低く、非常に浅いことからTK43相当であろう。大型提瓶(1)は見部が輪状に付くが、口縁端部はそのまま真っすぐに立ち上がる。大型という特異性ゆえに、丁寧につくっている可能性も考えられる。一応、TK10～TK43相当としておきたい。平瓶(9)は小型であり、つくりも粗雑である。TK43～TK209相当であろう。

これら須恵器の編年より平木1号墳の築造時期を求めるなら6世紀後半で、7世紀前半まで2～3度の追葬が行われたと考えられる。

須恵室陶棺は香川県下では、若宮神社後方墳(註2)、石清尾山(註3)、青ノ山山麓(註4)で出土しているが、そう多くはない。この須恵室陶棺が積極的に採用されるのが、対岸の岡山県である。岡山県では陶棺の編年が進んでおり、その一つ杉山編年(註5)を参考にするなら、TK217(新)以降となる。ただし、この編年は亀甲型陶棺を対象にしたものであり、家型と想定できる当古墳の陶棺にそのまま援用できないが、大きく変わるものではないだろう。おそらく平木1号墳においては、最終段階の追葬時に置かれたものであろう。

- (註 1) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- (註 2) 松本敏三、岩橋孝、齊藤賢一「香川県埴輪出土遺跡調査報告1（資料1）」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第3号 1986年
- (註 3) 長町彰「讃岐石清尾山発見の陶棺」『考古学雑誌』3-1
- (註 4) (註 2) と同じ
- (註 5) 杉山尚人「陶棺の研究」『考古学研究』33-4 1987年

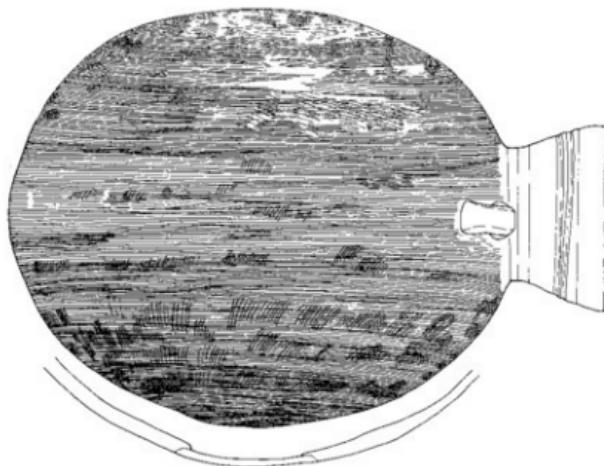


圖
11

大型提瓶実測図



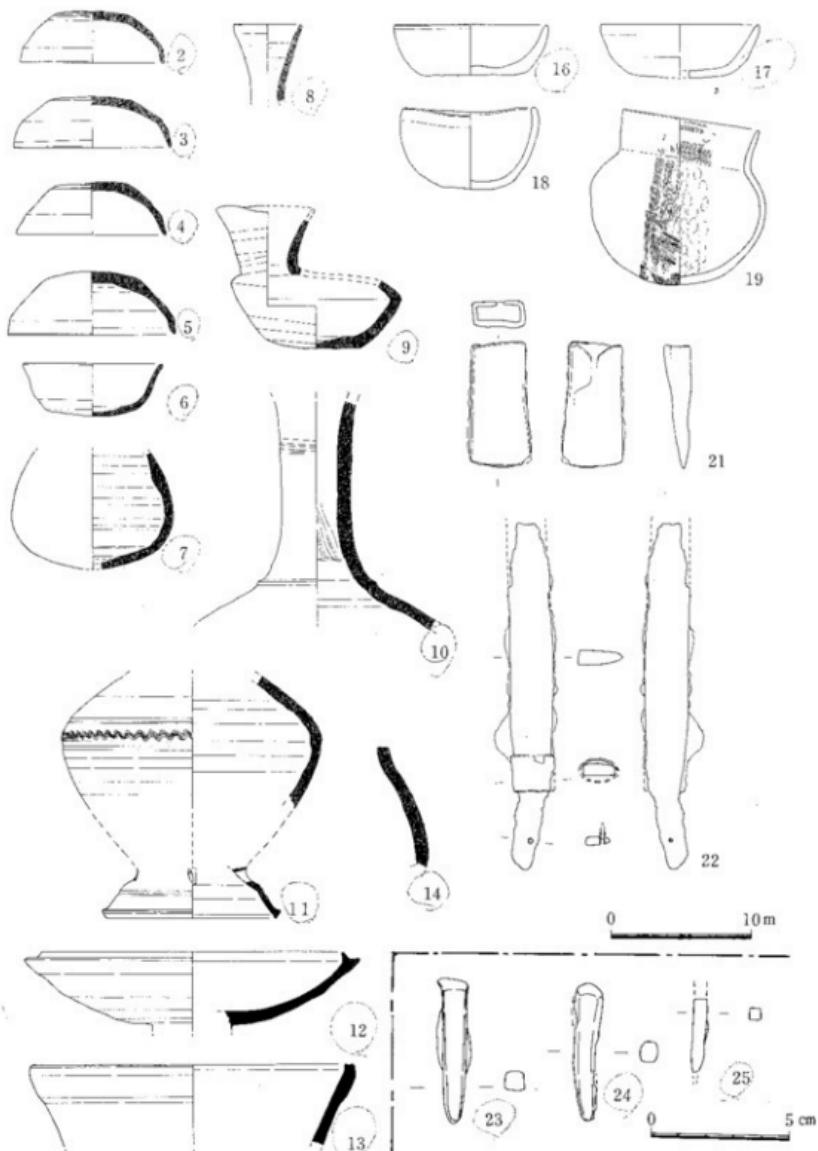


図12 出土遺物実測図

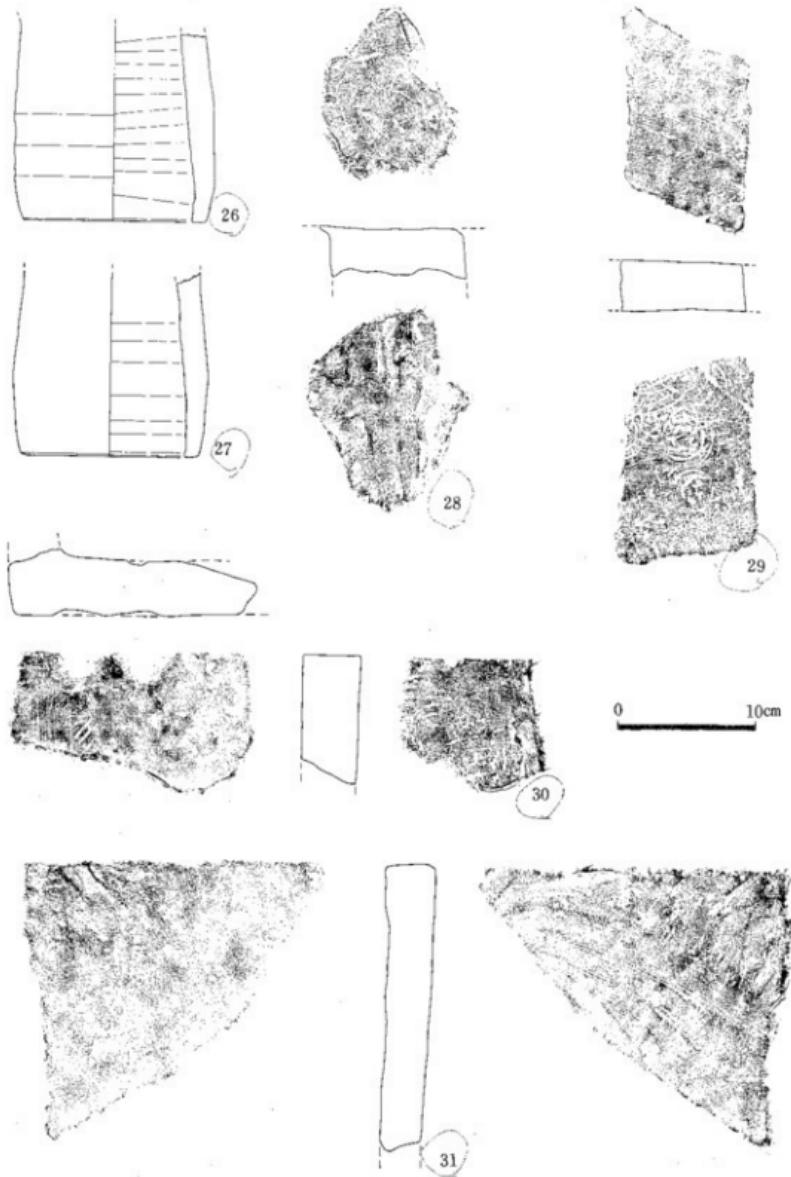


圖13 陶棺實測圖

表1 平木1号墳出土遺物観察表

須恵器

番号	種類	出土位置	出土層位	法量 (cm)	特徴	備考
1	提瓶	玄室 墓道	黑色土層 暗灰色粘質土層	口径 12.6 器高 42.7 腹径 35.9	口縁部内外面とも回転ナテ調整。体部内面は同心円文の当て痕を残す。体部外面は平行文の印き後全面にカキ目を施す。口縁部に2条の沈線。自然軸が口縁から肩までかかる。	色調…灰色 胎土…密 焼成…良好
2	环蓋	玄室 墓道	床面直上	口径 10.4 器高 3.7	天井部1/3ほど回転ヘラケズリ。他は回転ナテ調整。ただし内面頂部は回転ナテ後、一定方向のナテ。外面天井部に石を引っ張った傷がある。	色調…明灰色 胎土…密 焼成…良好
3	环蓋	墓道	黑色土層	口径 11.3 器高 3.6	天井頂部のみ回転ヘラケズリ。他は回転ナテ調整。	色調…灰色 胎土…密 焼成…良好
4	环蓋	玄室 墓道	床面直上	口径 10.8 器高 3.8	底部1/3ほど回転ヘラケズリ。他は回転ナテ調整。外面天井部に石を引っ張った傷が残り、また自然軸がかかる。	色調…明灰色 胎土…密 焼成…良好
5	环蓋	墓道	暗灰色粘質土層	口径 12.0 器高 4.5	天井部1/3ほど回転ヘラケズリ。他は回転ナテ調整。	色調…白黃褐色 胎土…やや粗 焼成…不良
6	环身	玄室 墓道	床面直上	口径 10.0 器高 3.8	底部 1/3ほど回転ヘラケズリ。他は回転ナテ調整。	色調…(外)灰色 (内)明灰色 胎土…密 焼成…良好
7	壺	墓道	黑色土層	腹径 11.5 器高 (8.3)	体部の破片。内外面とも回転ナテ調整。	色調…(外)灰色 (内)暗青灰色 胎土…密 焼成…良好
8	長頸壺	玄室	床面直上	口径 4.9 器高 (5.5)	小型の口頸部の破片。回転ナテ調整。	色調…明青灰色 胎土…密 焼成…良好
9	平瓶	墓道 墓道	黑色土層 暗灰色粘質土層	口径 6.0~7.5 器高 10.1	体部下半を回転ヘラケズリ。他は回転ナテ調整。	色調…暗灰色 胎土…密 焼成…良好
10	長頸壺	墓道	床面直上	頸部径 5.0 器高 16.6	頸部の破片。内外面とも回転ナテ調整。上部に2条の沈線と下部に凸帯を巡らす。自然軸がかかる。頸部と体部の接合部が明顯。	色調…暗灰色 胎土…密 焼成…良好
11	台付壺	墓道	暗灰色粘質土層	腹径 18.6 口径 12.0	体部および台の破片。体部外面下半を回転ヘラケズリ。他は回転ナテ調整。体部最大径の位置に6条の波状文と、その上下に沈線。台には1条の沈線と4方向から穿孔を施す。	色調…灰色 胎土…密 焼成…良好
12	有蓋高環	墓道	暗灰色粘質土層	口径 21.6 最大径 24.0	环部の破片。外面下半を回転ヘラケズリ。他は回転ナテ調整。	色調…灰白色 胎土…密 焼成…やや不良
13	壺	墓道	黑色土層	口径 23.4 器高 (5.8)	口縁部の破片。回転ナテ調整。自然軸がかかる。	色調…(外)明緑灰色 (内)明灰色 胎土…密 焼成…良好
14	壺	玄室		器高 (8.6)	口縁部の破片。回転ナテ調整。自然軸がかかる。	色調…青灰色 胎土…密 焼成…良好
15	环	墓道	床面直上	口径 12.0 底径 7.0 器高 3.4	底部を回転ヘラ切り。他は回転ナテ調整。	色調…灰色 胎土…密 焼成…良好

※は復元値、() は残存値

土器器

番号	種類	出土位置	出土層位	法量 (cm)	特徴	備考
16	环	墓道	黑色土層	口径 10.6 底径 6.8 壁高 3.6	底部は細いヘラゲズリとナデ。外面はヨコナデ。内面はナデ。	色調…白黄褐色 胎土…やや粗 焼成…良好
17	环	墓道	黑色土層	口径 11.3 底径 7.0 壁高 3.8	外面はヨコナデ。内面はナデ。	色調…明黄橙色 胎土…密 焼成…良好
18	碗	玄室奥	床面直上	口径 9.4 底径 3.7 壁高 5.8	内面はナデ。外面は調整不明。	色調…白黄色 胎土…やや粗 焼成…良好
19	埴	玄室奥	床面直上	口径 9.8 壁高 10.9	体部外面は刷毛調整と一部ナデ。体部内面はオサエとナデ。口縁部は刷毛調整とナデ。	色調…(外)暗褐色 (内)淡赤褐色 胎土…やや粗 焼成…良好 香川大学調査時出土
20	环	玄室 墓道		口径 14.1 壁高 (2.7)	体部下半を回転ヘラゲズリ。他はナデ調整。	色調…淡黄色 胎土…密 焼成…良好

※は復元値、() は残存値

鉄製品

番号	種類	出土位置	出土層位	法量 (cm)	特徴	備考
21	斧	墓道	暗灰色粘質土層	長さ 8.9 幅(頭部)3.8 (刃部)4.4 厚さ 1.9	刃部の一部を欠損。いわゆる袋状鉄斧。 頭部の断面は長方形。	
22	刀	玄室奥	床面直上	長さ (24.5) 幅 3.1 厚さ 1.0	刀身上部を欠損。刀身と柄の境に金属製の板を巻き付ける。柄にはめ釘が貫通している。	
23	釘			長さ 5.3 幅(頭部) 1.1 (先端) 0.7	完形。頭部は幅が広がり、刀状になる。 断面は四角形。	香川大学調査時出土
24	釘			長さ 5.0 幅(頭部) 1.0 (先端) 0.7	わずかに欠損。断面は四角形。	香川大学調査時出土
25	鉄鎌 ?			長さ (2.6) 幅 0.4	鉄鎌の柄の一部か。断面は四角形。	香川大学調査時出土

() は残存値

陶棺

番号	部位	出土位置	出土層位	法量 (cm)	特徴	備考
26	脚部	墓道	床面直上	底径 13.1 最大径 14.4 壁高 (14.4)	内外面とも同軸ナデ調整。須恵質。	色調…明灰白色 胎土…密 焼成…良好
27	胸部	玄室 墓道	床面直上	底径 12.8 最大径 14.1 壁高 (13.3)	内外面とも回転ナデ調整。須恵質。	色調…明灰白色 胎土…密 焼成…良好
28	底板	玄室	床面直上	厚さ 3.6	上面は調整不明。下面は一定方向のナデ。 脚部接合痕が明瞭に確認できる。須恵質。	色調…明灰色 胎土…密 焼成…良好
29	側壁	墓道	床面直上	厚さ 3.7	外面は格子の叩き後、一定方向のナデ。 内面は同心円文の当て痕が残る。須恵質。	色調…明灰白色 胎土…密 焼成…良好
30	側壁	墓道	床面直上	厚さ 4.2	側壁のコーナーの破片。外面の一面は叩き後ナデ。外側のもう一面は縦方向のナデ。内面はナデ。上面は一定方向のナデ。須恵質。	色調…明灰白色 胎土…密 焼成…良好
31	側壁	墓道		厚さ 3.6	側壁の上部の破片。外面は格子の叩き後、ナデ。 内面は不定方向のナデ。上面もナデ。須恵質。	色調…明灰色 胎土…密 焼成…良好

※は復元値、() は残存値

装身具

番号	種類	出土位置	出土層位	法量 (cm)	特徴	備考
32	金環	玄室		直径 2.0 厚さ 0.4	完存。金張りも完存。輪・断面は円形。 金箔は切れ目端面で閉じている。	香川大学調査時出土
33	金環	玄室		直径 1.4 厚さ 0.25	腐食がかなり進行。外面の一部に錆鏽。 輪・断面は円形。	香川大学調査時出土

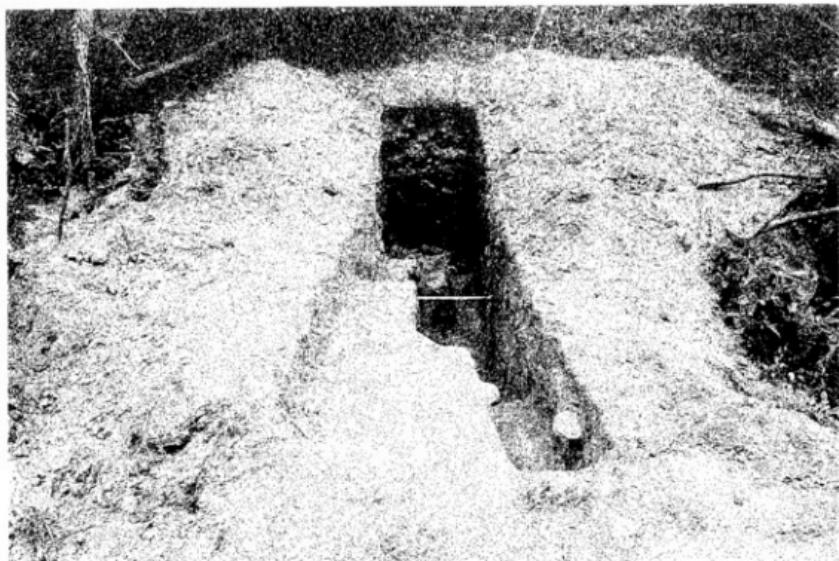
図 版



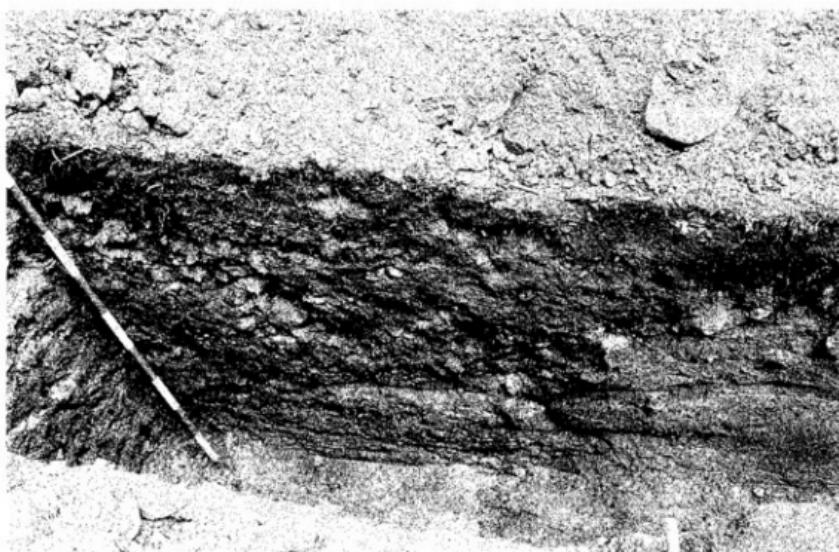
1 調査前風景（遠 景）



2 調査前風景（伐採後）



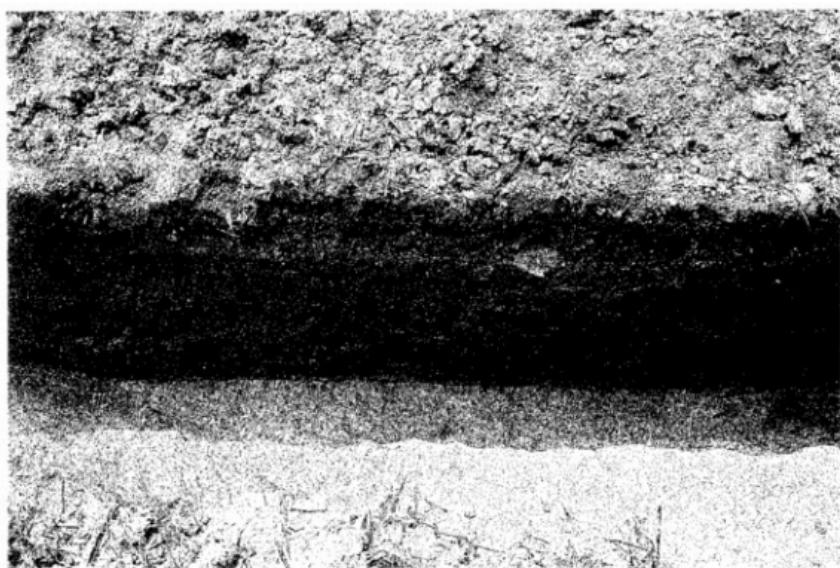
1 第1トレンチ全景（南西から）



2 第1トレンチ東壁



1 第2トレンチ全景（西から）



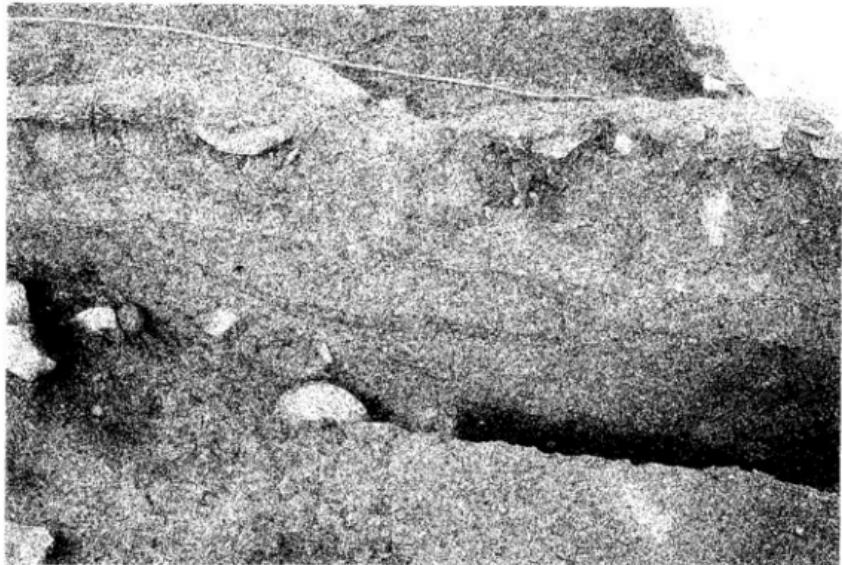
2 第2トレンチ南壁



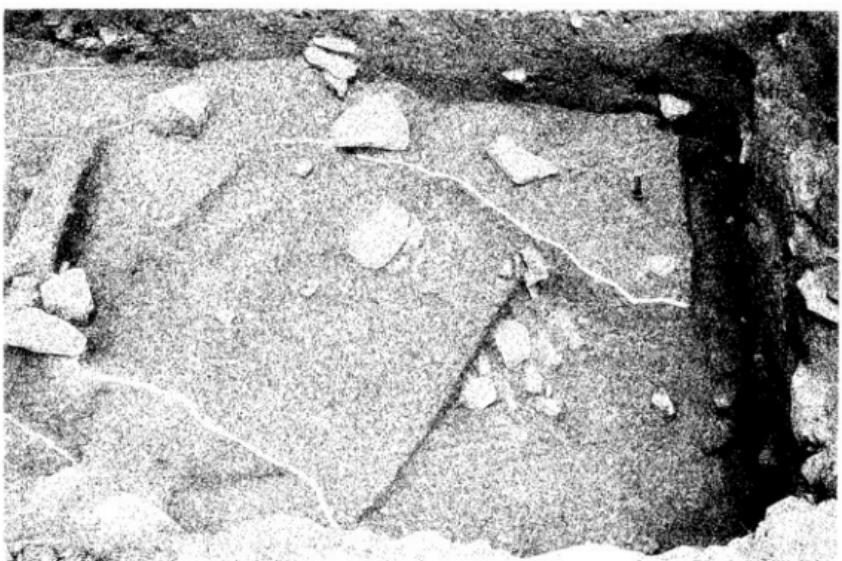
1 第3トレンチ全景（北から）



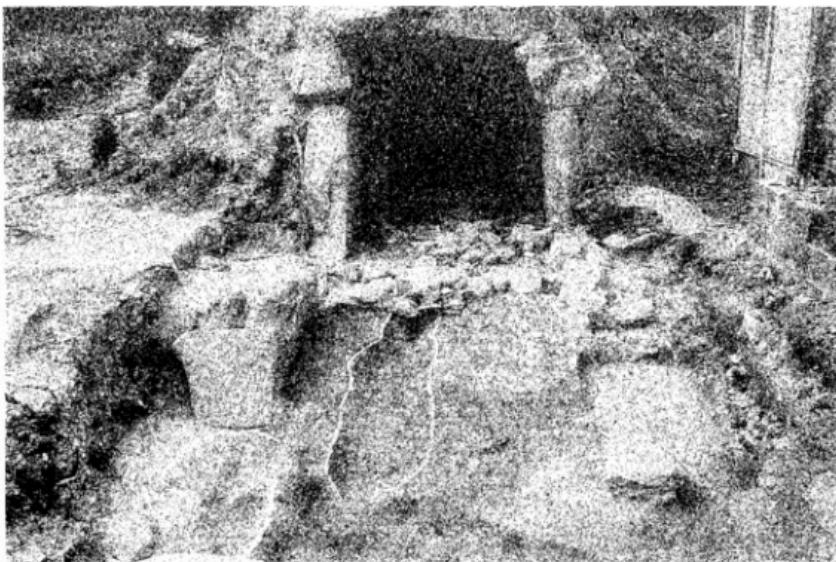
2 第3トレンチ南壁



1 第3トレンチ中央断面（西向）



2 墓道全景（西から）



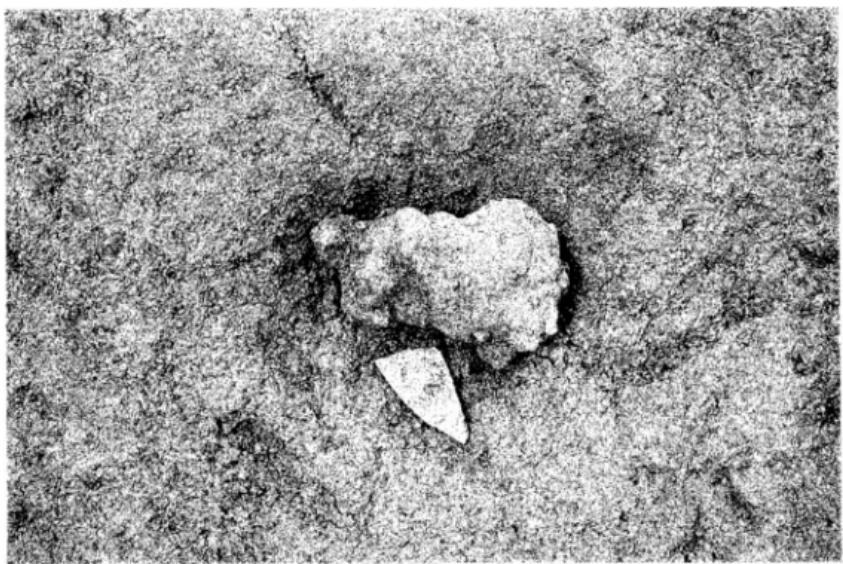
1 排水溝全景（南から）



2 墓道須恵器出土状況



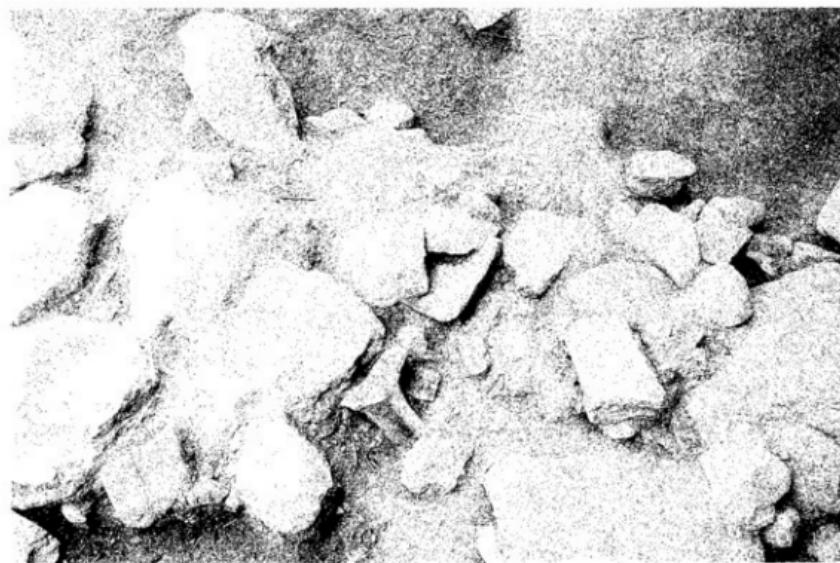
1 羨道土師器出土狀況



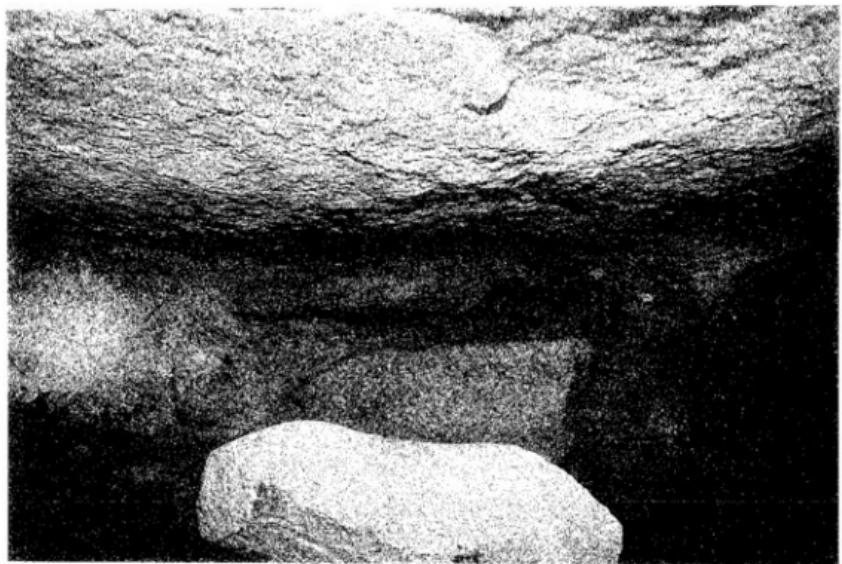
2 墓道鐵斧出土狀況



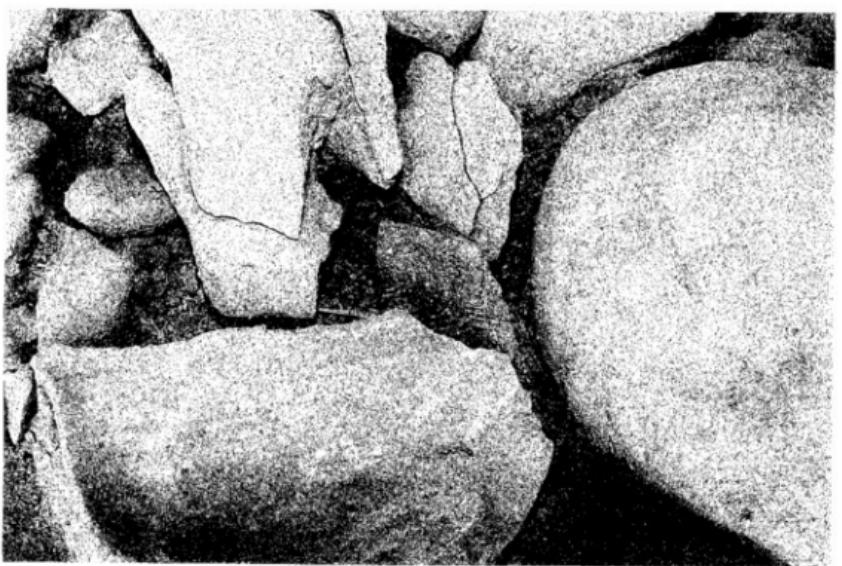
1 羨道陶棺破片出土状况



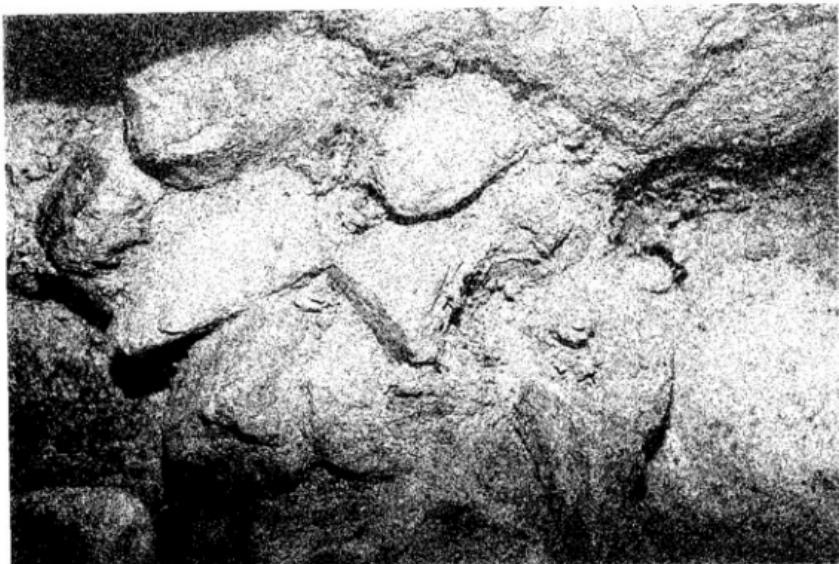
2 羨道須惠器、陶棺破片出土状况



1 玄室鐵刀出土狀況



2 玄室須惠器出土狀況



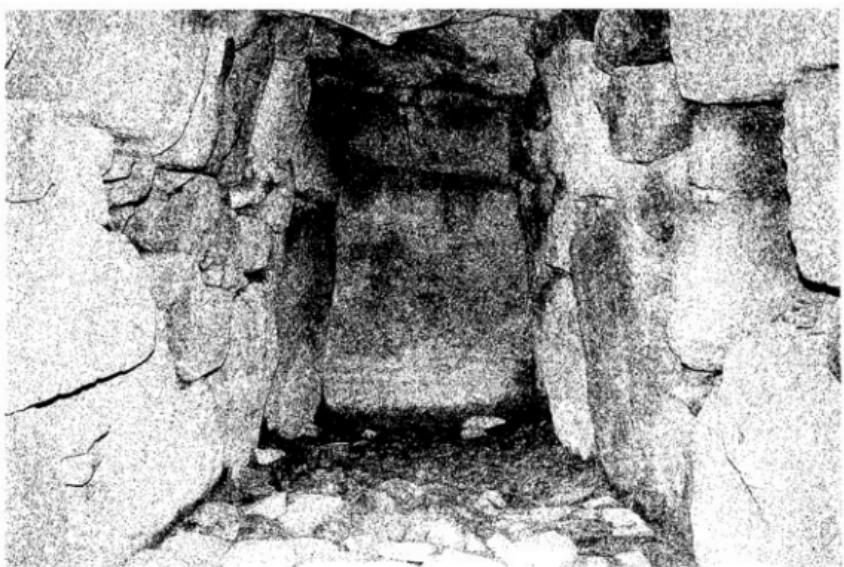
1 玄室陶棺破片出土状况



2 石室前面



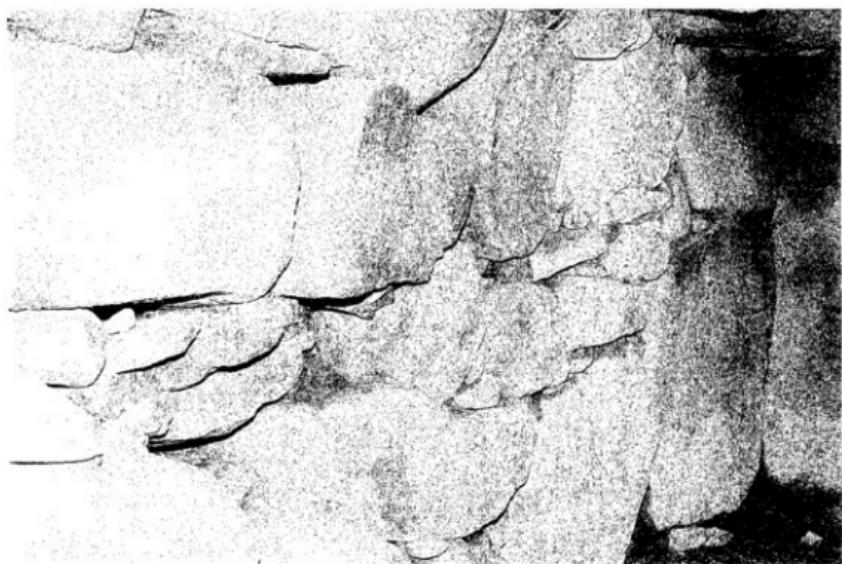
1 玄門（羨道から）



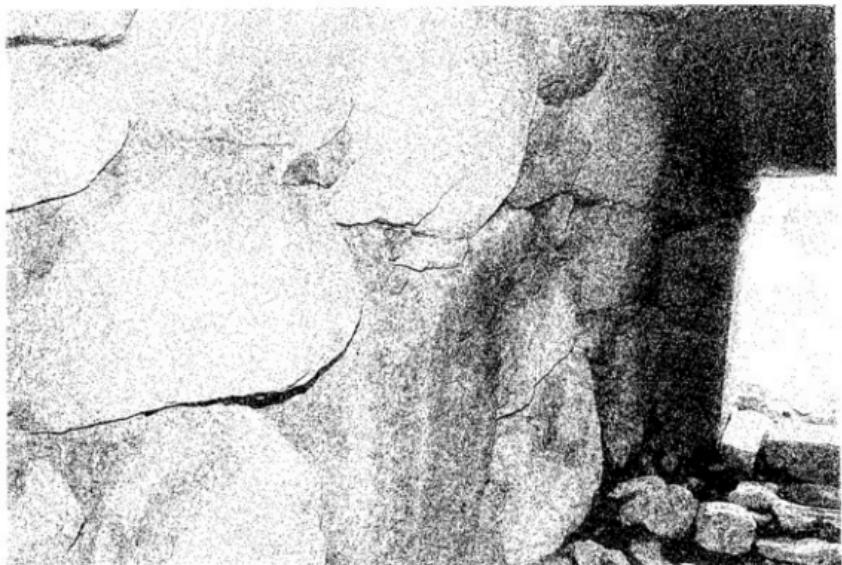
2 奥壁



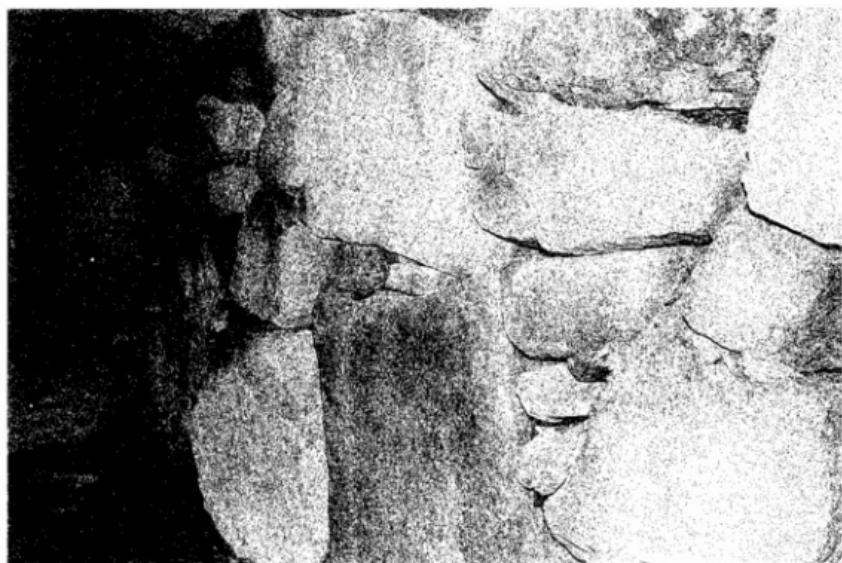
1 玄室右側壁（奥から）



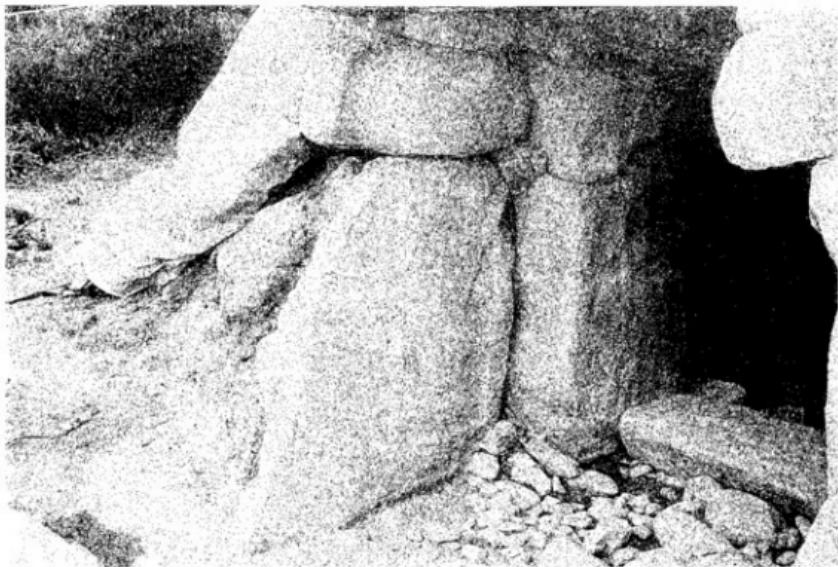
2 玄室右側壁（羨道から）



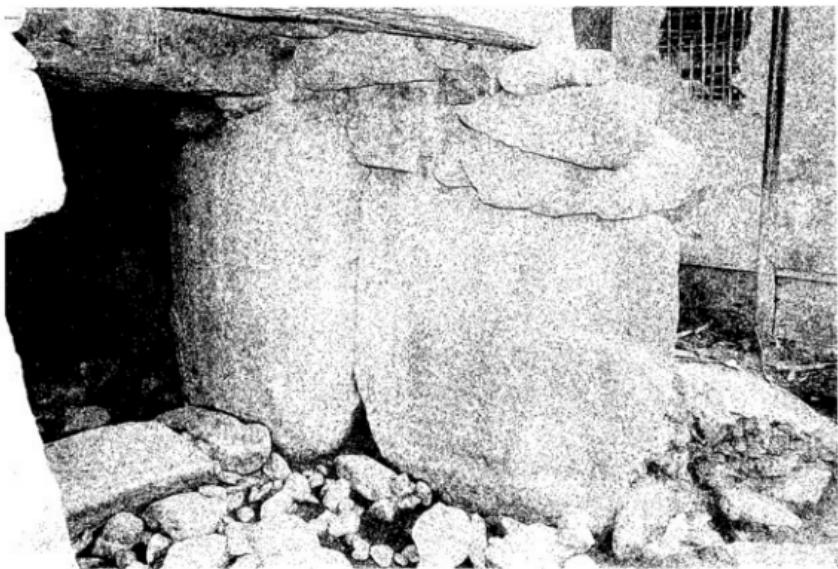
1 玄室左側壁（奥から）



2 玄室左側壁（羨道から）



1 條道右側壁



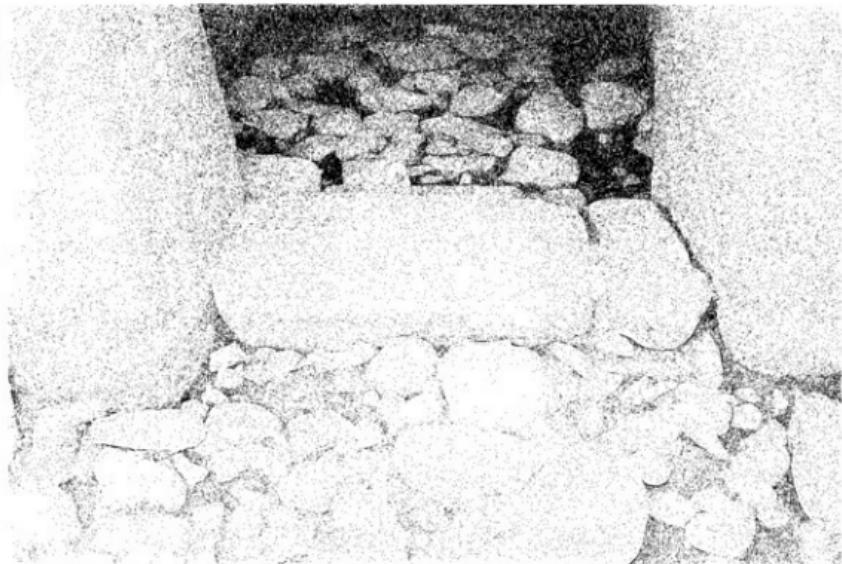
2 條道左側壁



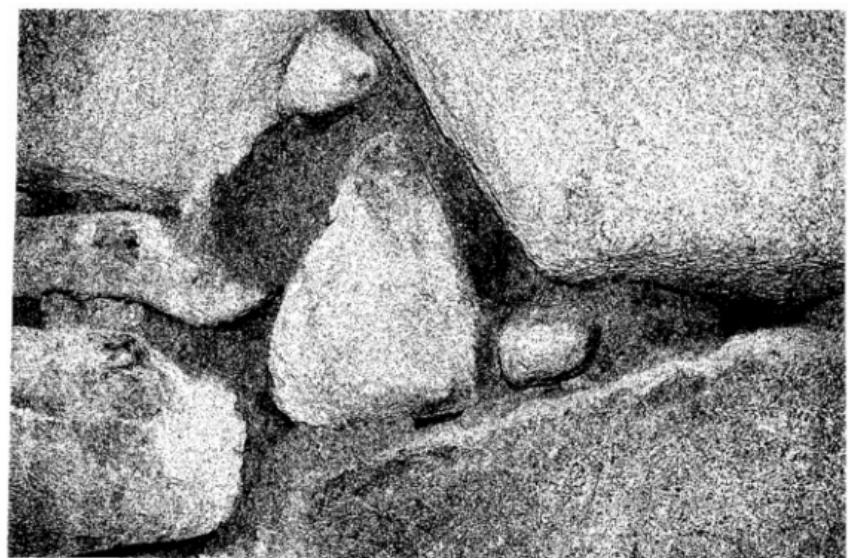
1 玄門（奥から）



2 床面（奥から）



1 仕切り石（羨道から）



2 目貼り（玄室左側壁）



1 側壁裏側（玄室左側壁）



2 側壁裏側（羨道左側壁）

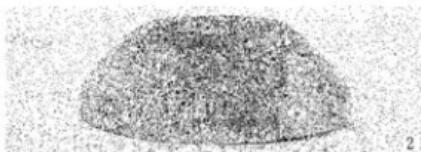


1 墓道より墳丘を見上げる



2 発掘作業風景及び見学風景

15



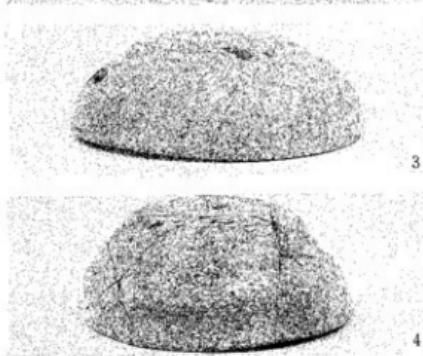
2



3



1



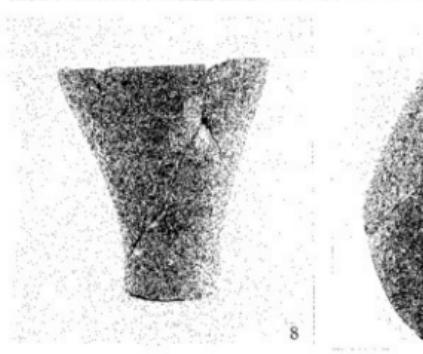
4



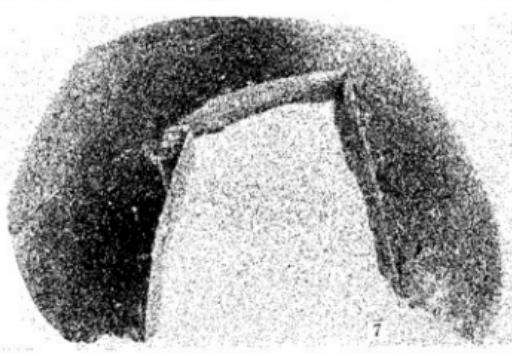
5



10



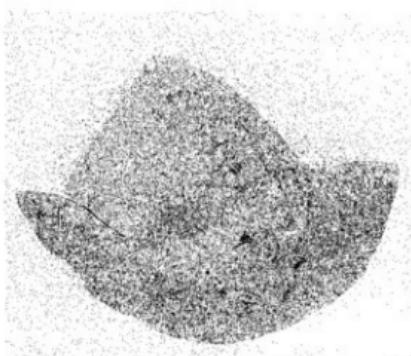
8



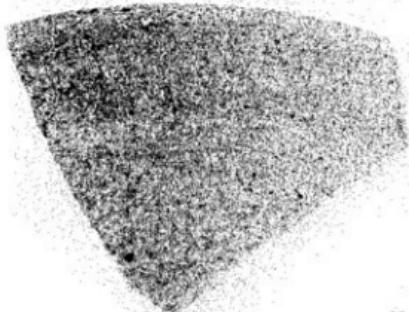
7



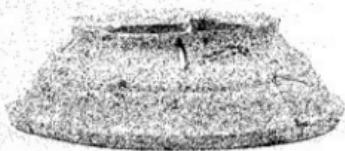
9



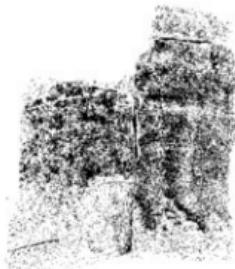
11



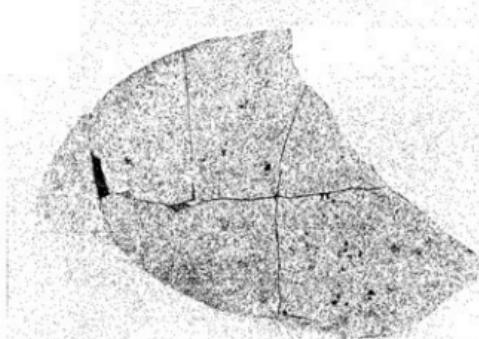
13



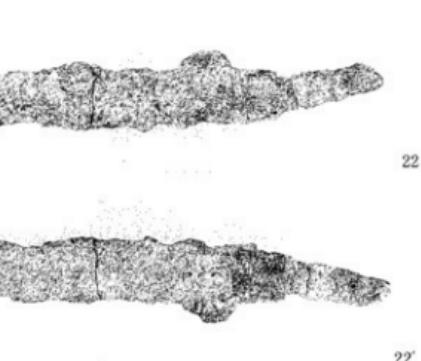
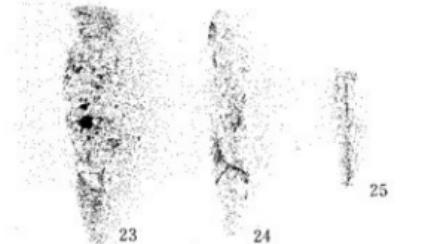
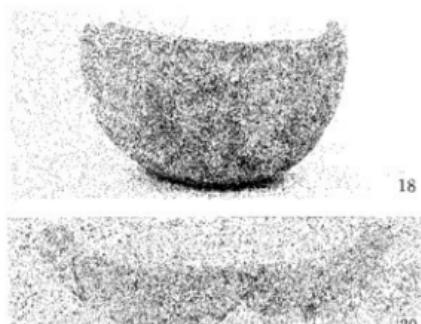
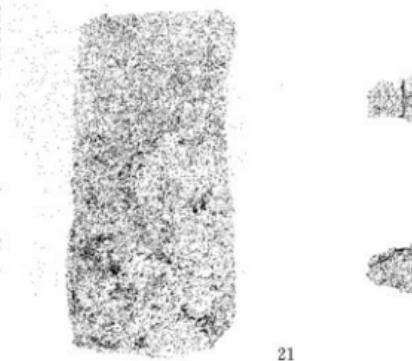
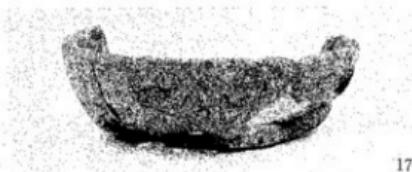
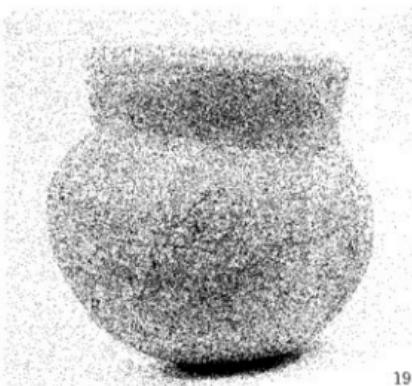
11'

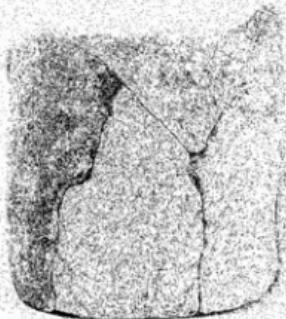


14



12

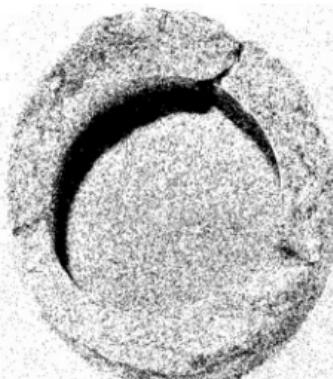




26



27



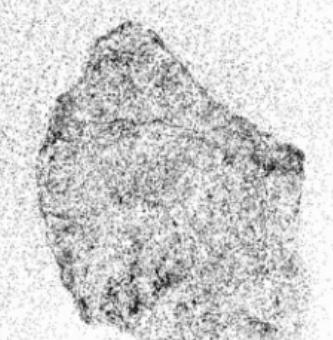
26'



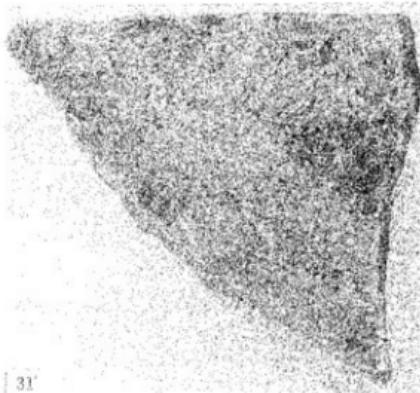
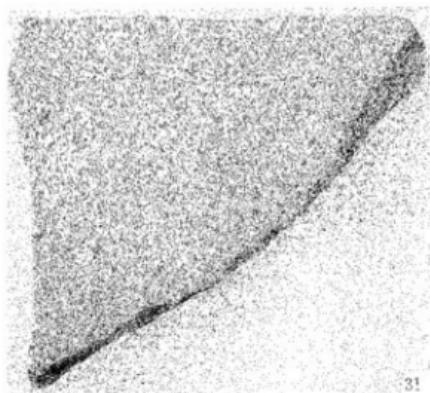
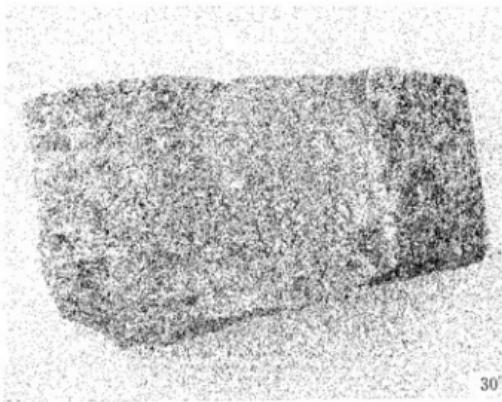
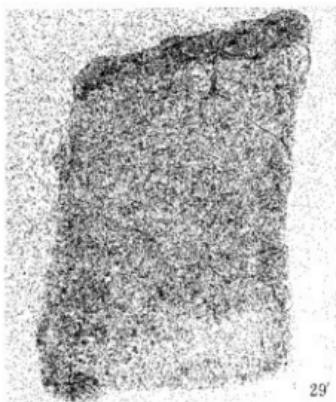
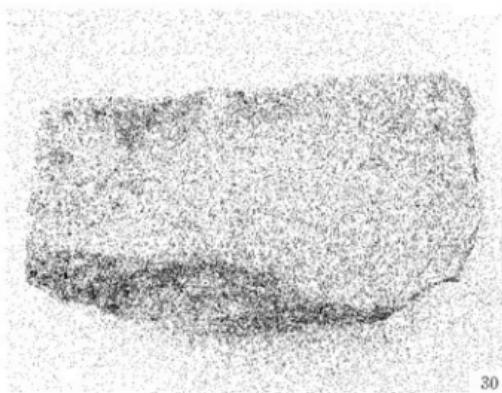
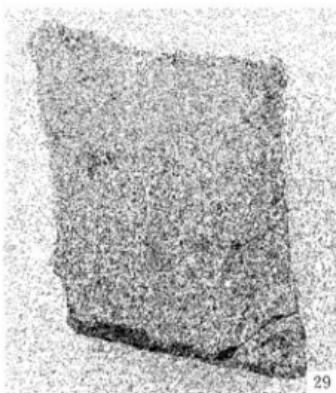
27'



28



28'



平木1号墳試掘調査報告書

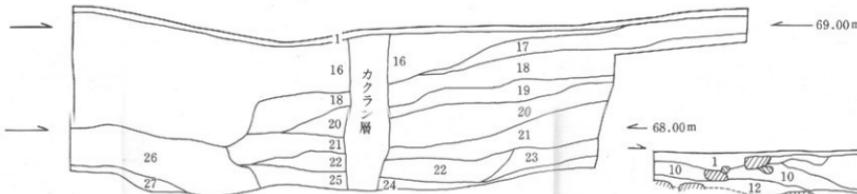
1990年3月31日 発行

編集・発行 高松市教育委員会

高松市番町1丁目8番15号

印 刷 ワークステーション

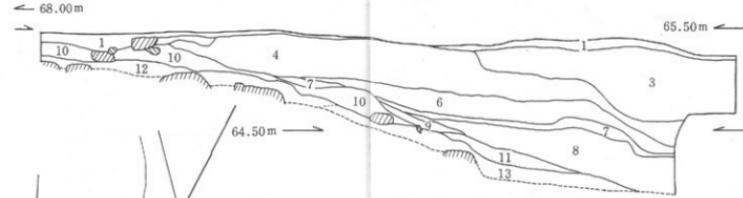
高松市林町1405-1



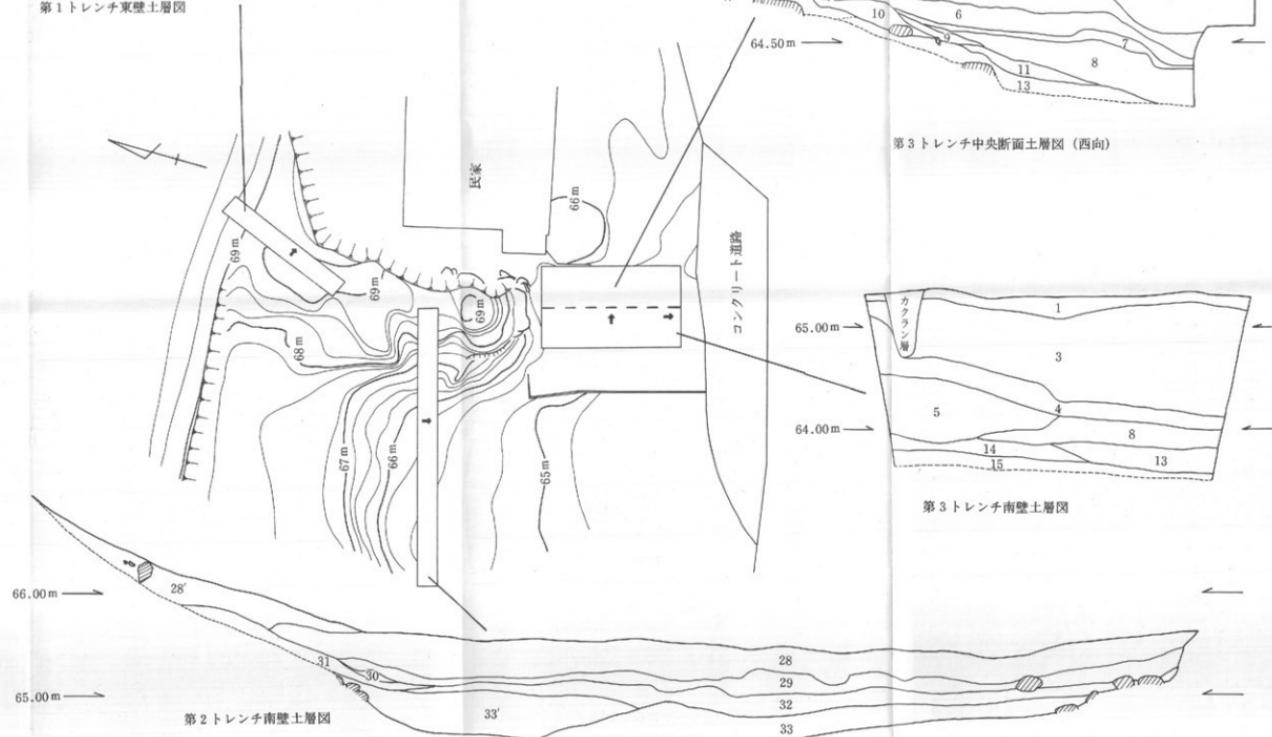
第1トレンチ東壁土層図

図3 第1～3トレンチ土層図

塙丘は縮尺1/200
断面は縮尺1/40



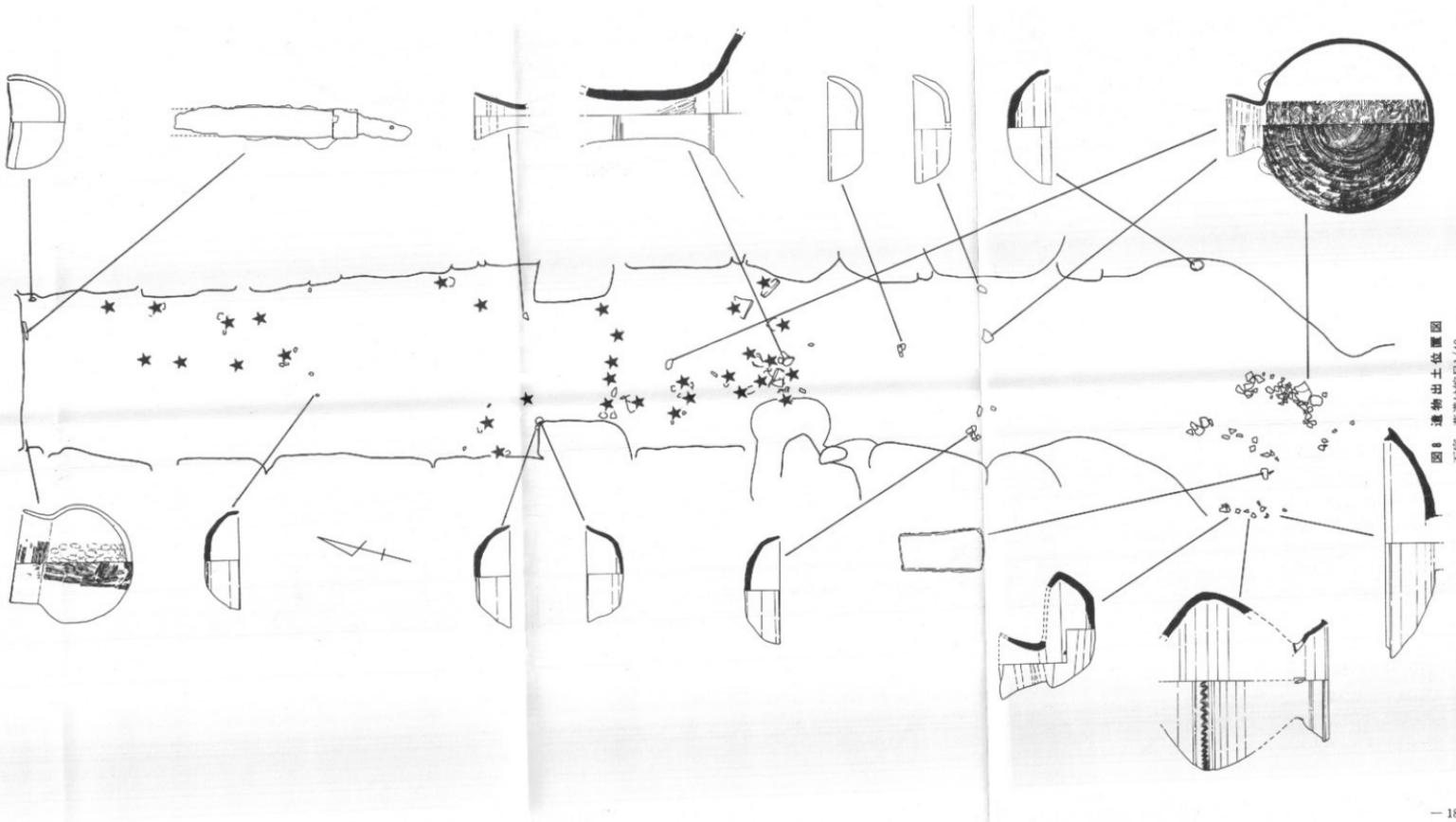
第3トレンチ中央断面土層図（西向）



第3トレンチ南壁土層図

第2トレンチ南壁土層図

図8 遺物出土位置図
石室・墓道は幅140
地盤は幅180、それ以外の遺物は幅140
★印は胸棺出土位置



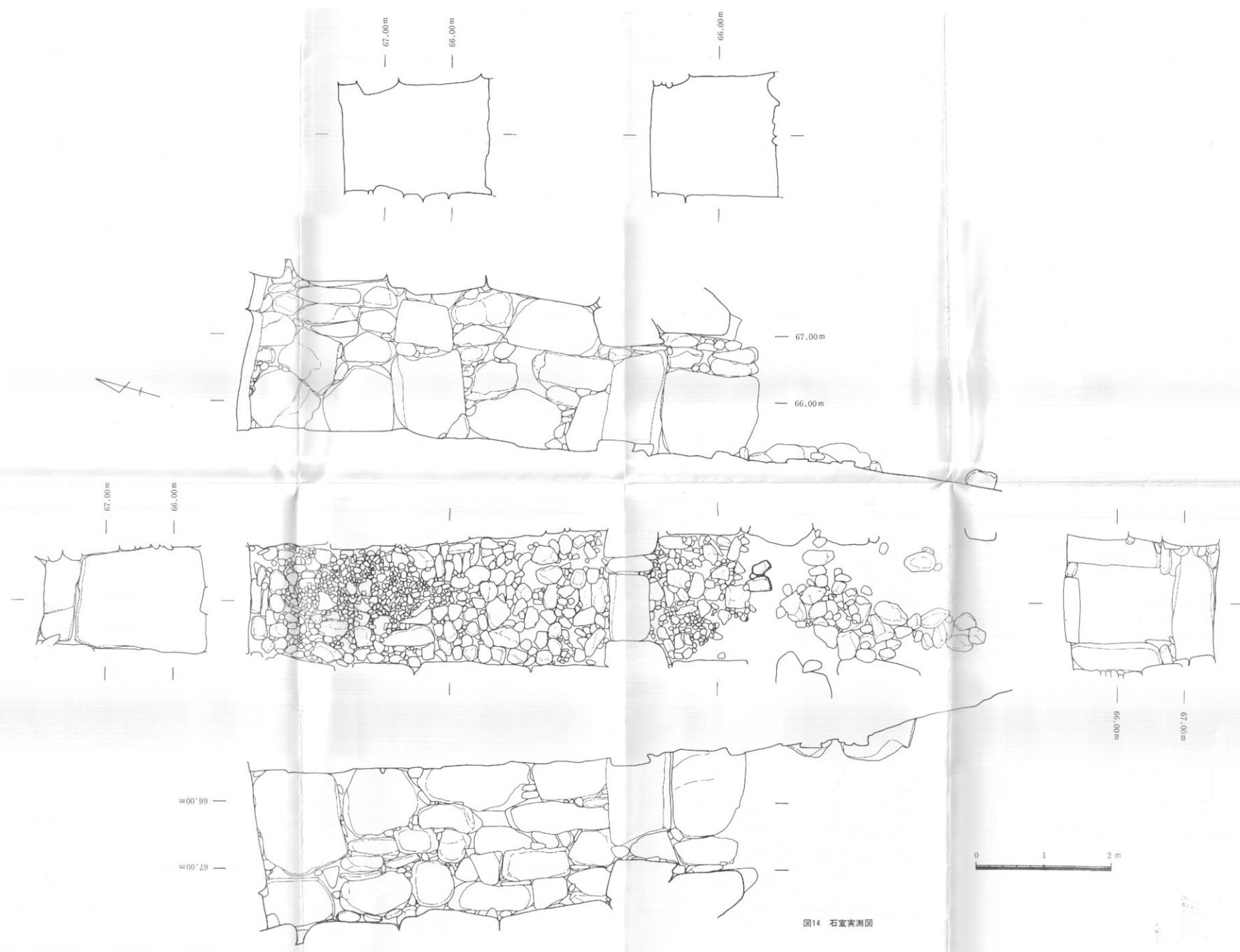


图14 石室实测图